

近代中国研究センター

彙報

6

1965





も く じ

宮下忠雄：中国農村人民公社管見	1
吉田金一：モスクワとレニングラードの図書館管見	7
衛藤藩吉：中国史学史学会に出席して	15
市古宙三：近刊辛亥革命史料紹介	21
センター・ニュース	31





## 中国農村人民公社管見

宮下 忠雄

## 1. は し が き

私は昨年12月17日、香港より広州に入り、次いで北京、武漢、上海の各地を訪問して、ふたたび広州に出で、同月31日、広州を去って香港に出た。わずか半カ月の旅行によっては、新中国の実相をつかむことは到底不可能である。さしあたって、多少なりとも成果をあげるために、視察の重点を次ぎの二つの課題にかぎった。第一は中国共産党の通貨金融政策史にかんする新資料の発見ないし収集であり、第二はできるかぎり中国農村の人民公社を見ることである。第一の課題については、近く刊行される拙著「中国の通貨・金融制度」の末尾に「追記」としてその成果の一斑を記した。ここでは、第二の課題に答えようとしている。他日の研究に対するメモをそのまま清書したものにすぎず、もとより公表に値するものではない。

## 2. 私が見た人民公社

今回の旅行中に私が見学した農村人民公社は次の4所である。

## (一) 広州郊外の新滘人民公社

珠江に面している。世帯数11,000戸、人口45,000人で、17の生産大隊、276の生産隊に分かれている。耕地面積は49,000華畝（約3,200ヘクタール）で、その内訳は蔬菜栽培16,000華畝、果樹栽培15,000華畝、甘蔗栽培10,000華畝、養魚場5,000華畝、稲作3,000華畝であり、したがってこの人民公社は蔬菜や果物の生産を主としている。1958年8月、12個の高級農業生産合作社が合併して成立した。

人民公社化後、努力してきた工作部面は次の通りである。

## (1) 農田の基本建設

この地方は解放前から土地の高低が多く、珠江に面している関係上、低地が度々、浸水の害を受けた。解放後、互助組から高級社までの農業合作化の過程においても、この問題はついに根本的には解決せられず、その解決をみたのは人民公社が設けられてのちのことであった。すなわち1959年10月から60年7月までの短期間に2,000人の労働力を動員して公社をめぐる河川の要所に

15キロにわたって堤防をきずき、そのあいだに7カ所の水門をつくった。私はその水門の一つを見たが、深さ11メートル、長さ66メートルにおよぶもので、全体としては鉄筋コンクリートでできた橋を形成していた。その材料のうちセメントだけは国家よりえたが、他は社員の自力によって調達したという。ほかに48カ所の電気によるポンプの排水・灌漑ステーションを設けた。以上によって土地の経営面積が拡大せられ、深耕とあいまって土地の潜在力を発揮させることができたのみならず、1960年の大水害を克服し、63年の大かんばつをきりぬけることができた。また5,000華畝の土地が二毛作になった。

## (2) 多角経営

すでに指摘したように、野菜、果物の生産を主とし、これに甘蔗の栽培、養魚および稲作を配していること自体がすでにこの公社の経営の多角性を示すものであるが、さらに工場の建設と牧畜業について附言しなければならない。工場の建設については、農機具製造工場、石灰製造工場、レンガ製造工場、農産物加工工場、刺繍工場、等がある。農機具製造工場には従業員150人がおり、水揚ポンプ、深耕用のくわ、5トン積木造船（これはこの地方では重要な交通の要具である）等を製作し、またトラックの修繕をも行なっている。工場の入口の看板には「新滘農械綜合廠」の文字が見られた。これは公社直営の工場である。赤レンガで出来た立派な建物を使っているが、聞けばそれは元来、李福林（この地一帯の大地主で土匪であった）がオリーブ貯蔵のために用いた倉庫であったという。生産大隊や生産隊にもそれぞれに適合した性質と規模の農機具工場があり、比較的簡易な農具の製造ないしその修理を行なっている。したがって、くわ、かま、すきおよび木造船（サンパン）は完全に自給している。牧畜業について言えば、現在、乳牛650頭（高級社時代—1957年—は250頭であった）、蜜蜂1,500箱、豚12,000頭（高級社時代は8,000頭であった）を飼養している。

## (3) 技術改良

各生産大隊に技術委員会、生産隊に技術小組を設け、篤農家をそれらの中に入れ、かつ大衆に頼って農業上の技術の改善に努力してきている。その結果、蔬菜の栽培



は従来、年5回しか行なわれなかったのが、いまは8回となっており、稲作も良種にきりかえたので1963年に1華畝あたり7,500斤(1957年には5,400斤)となり、果物の生産総額は1963年に3,300万斤(1957年には2,400万斤)となり、養魚も1963年には1華畝あたり350斤(1957年には250斤)の収穫となった。

#### (4) 教育および福利事業

この公社には小学校15所、その生徒数11,000人、中学校1所、生徒数400人がある。病院についていえば、総合中心病院1所、分院1所、診療所14所がある。公社全体で医師54人をもっている。私がみた診療所(「衛生院」という)は公社直属のもので、医師十数人がおり、病床80余をもち、レントゲンや近代的な歯の治療器械などをそなえていた。現在、この公社に属する農家では自宅で分娩する者はなく、全部、病院でお産をするという。なお、この公社には移動映写隊2つ、有線放送所1所をもっている。共同食堂、託児所、幼稚園、養老院については次節において論及する。

公社の社員代表大会は社員代表310人によって構成されている。年2回ないしは4回開かれる。社員代表の任期は2年である。社員代表大会が管理委員会と正副社長をえらぶ。現状では社員代表の25%が婦人である。

三級の管理が行なわれているが、基本的な経済計算単位は生産隊である。各生産隊ごとに生産計画が定められる。労働時間は現在(冬期)7時間で、農繁期には9時間である。工分(点数)によって各自の収入が計算される。工分には500種類ぐらいあるという。野菜の栽培だけでも100種類の工分がある由である。

この公社の場合、公社直営の事業としては、大型水利事業、刺繍工場、農機具工場があり、生産大隊経営の事業としては、大隊の範囲内の水利建設、レンガ製造工場、農産品加工工場、牧畜場、優良な稲苗、ひな鶏の育成とその生産隊への配給がある。

1963年に、この公社の労働力1人あたりの年収入は平均して450元(1元は日本円150円にあたる)であった。1957年にはそれは310元であったから、現在は高級社に比し40%の収入増である。自留地の経営ないし家庭の副業より生ずる自己収入は右の収入中最高15%を占めており、一般には10%を占めている。自留地および自由市場については次節に論及する。

男子18才から35才まで、女子18才から30才までは志願して民兵になることができる。各生産大隊に民兵の「営」があり、各生産隊に「排」がある。地主や富農は民兵になることはできない。

#### (二) 広東省南海県の塩歩人民公社

この公社の世帯数は15,425戸、人口60,323人。これが12の生産大隊、220の生産隊に分かれている。労働する農家は8,477戸、農業人口は32,600人で、その他はサーヴィスや手工業に働いている。公社全体の面積は43.64平方キロメートルで、耕地面積は36,769華畝(2,453ヘクタール)である。この公社を回ってみると、かなり多数の商店(もちろん、国営、公私合営の商店か合作商店である)が密集して数条の商店街があり、ちょっとした都会を形成している部分を含んでいることがわかった。

この公社は稲作に重点をおいている。このことは以下の耕地の配分によっても明らかである。すなわち稲作面積32,163華畝(耕地の86%)、蔬菜畑面積1,370華畝、花、果物畑面積821華畝、甘蔗畑1,600華畝、養魚場1,430華畝、ほかに落花生の栽培と牧畜業の経営に若干の耕地が使用されている。

1958年に47個の高級農業生産合作社が合併して人民公社となったものである。

当地の地形は珠江に面し、河川が多く、また東は広州、西は仏山に近く、交通が比較的便利である。デルタ地帯であるために土地は肥沃であり、生産条件は元来、良好であった。しかし解放前の農業生産は大したことはなかった。それは年々洪水になやまされ、また雀、はえ、蚊およびねずみの4つの害を受けたためである。また土地の80%は地主ににぎられていたからでもある。地主の人口は農村の人口の6%しか占めていなかった。解放前の米の1華畝あたり最高生産量は500斤であった。当時は流浪する農民が多かった。1953年から56年までの農業の合作化の発展により8,000世帯の農家が47の高級社に結集された。合作化の完成、高級社の成立により、小型の水利建設、農田建設が推進せられたので、農業生産の上昇をみた。例えば、米(もみ)の1華畝あたり生産量は1949年の600斤から57年の721斤に上昇し、養豚数は1949年の11,000頭から57年の12,571頭に増加し、1労働力あたりの社員の平均収入は1949年の95元から57年の138元に増加した。

高級社の成立によって生産は増加したが、そこに限界があった。その限界を打破ったのが人民公社である。1958年、人民公社が成立して以来、全力をあげて農田の基本建設、多角経営にとりくんだ。

農田基本建設の進展状況の一斑は次の通りである。1959年に1,800キロワットの変電所が落成し、架線は45キロメートルにおよび、これにより公社の農業生産上の需要を満たしたのみならず、60%の社員の点燈をも解決した。1959年から現在までに、水揚ポンプによる排水・灌漑ステーションを45所設けた。その使用電力は1,248キロワットに達する。現在までに46キロメートルにわた



る用水路が完成しており、自然的灌漑は90%に達している。洪水防止のために、地区内に7条の堤防を新築し、あるいは改築した。公社内に水門34所が設けられた。珠江に面したところに他の公社と一緒に大水門をつくった。これによりかんばつを防ぐほか、塩水の浸入するのを防いでいるのである。農業の機械化について一言すれば、トラクターステーションが1所あり、所有トラクターは10台、農耕の40%は機械化している。

公社経営の農村工業には、食糧加工工場2所、レンガ製造工場2所、石灰工場2所、農機具製造工場1所、碎石場1所、農業科学研究ステーション1所がある。生産大隊では、マッチや爆竹の製造、大工仕事、牧畜業、簡単な農機具の修理を営んでいる。

かような努力に加えるに、深耕細作、八字の憲法の貫徹をもってし、また大衆の創意と生産意欲を発揚せしめたので、たびたびの自然災害にも打ち勝ち、農業生産は著しい上昇を示した。すなわち1959年の大洪水を防ぎ、7カ月もつづいた63年の大かんばつのおりにも豊作をおさめ、64年の台風と洪水にもうちかった。病虫害も最少限度におさえることができた。

最近における農業生産状況は次の通りである。米は1963年に1華畝あたり1,170斤で、64年には1,120斤の見込みである。1964年の減退はちょうど開花期に台風に見舞われたためである。この人民公社全体の歴年の米の生産総量は1958年3,000万斤、59年2,700万斤、60年2,770万斤、61年2,926万斤、62年3,160万斤、63年3,826万斤である。豚の飼養は1963年29,278頭で、64年は32,000頭以上の見込みである。鶏、鶩鳥、あひるは最近、年15万羽以上で、蔬菜、魚、果物も大幅に増産し、副業、手工業も相当な発展を示している。

生産の発展にともない、社員に対する分配も増えてきた。1963年に1労働力あたり平均年収は298元であった。64年の平均年収は前年に比して減らない見通しである。けだし米の生産は減退したが、牧畜業の発展がこれをうめあわせているからである。なお、食糧の配給量は1963年に老幼をふくめて1人あたり年平均535斤であった。

文化、衛生、教育については次のような発展を示した。小学校は公社成立以前は18所、児童数6,800人であったが、現在は47所、児童数12,500人に増加している。中学校は公社成立以前は1所、生徒数530人であったが、現在は4所、生徒数1,860人に増加している。病院は現在、2所あり、各生産大隊に診療所がある。従業者数は147人で、医者45人いる。公社、生産大隊、生産隊のそれぞれに幼稚園や託児所がある。文芸、娯楽方面についていえば、劇場1所、文化宮1所、有線放送所1所、夜間球場（バスケットやバレーを行なう）1所、移動映

写隊1がある。移動映写隊の活動によって、社員は週1回は映画を見ることができる。劇場を見学したが、1,400人が入れる大きなもので、この日の出し物は「南方来信」という南ヴェトナムで活躍する北ヴェトナムの秘密工作隊の女主人公を取扱った劇であった。

この公社においても、基本的経済計算単位は生産隊である。生産隊では農業生産のほかに関るときに小規模な手工業や副業にかんし集団生産を行なっている。

自留地、家庭副業および自由市場については次節において論及する。

公社には国家が買い上げた食糧を国家のために保管する倉庫があることはかねてより知っていたが、この公社にはそれがあつた。なお、公糧として供出を完成したのちの米すなわち「余糧」を国家に売る場合には、国家は公糧に対する米価の20%増で買上げるといふ。米を国家におくる運賃は、公糧の場合には国家がこれを負担し、余糧の場合には、生産隊がこれを支払うのである。

#### （三）北京西郊中保友好四季青人民公社

この公社の世帯数は8,000戸、人口は35,000人である。労働力は14,000人で、そのうち女子が46%を占めている。耕地面積は40,000華畝（約2,600ヘクタール）で、主として蔬菜をつくっている。12の生産大隊、125の生産隊に分かれている。

この地区が解放されたのは1949年の初めであり、同年の冬に土地改革を行なった。1950年の冬に互助組の結成に着手し、その後、初級社を経て、1956年に高級社に移行した。そして1958年8月に、11個の高級農業生産合作社の合併によってこの公社が成立したのである。かような組織上の発展過程は農民の自覚の発展過程であり、また生産の発展過程でもあった。

公社化後の建設の進展状況の一斑は次の通りである。

まず水利建設についてのべれば、電気ポンプをすえつけた井戸は高級社の時代にはわずかに11個しかなかったが、1963年までにそれは403個に増えた。また公社は2,500名の労働力を組織して灌漑用水路をつくったが、これにより533ヘクタールの耕地を灌漑することができた。現在、この公社では全耕地の90%を灌漑することができる。

農業の機械化についていえば、自力をもって農業機械を買い入れた。現在、トラクターを19標準台（1標準台は15馬力のトラクターをさす）を有し、ほかに小型トラクター10台、トラック10台、電力による排水灌漑用の機械498台をもっている。

叙上の工作と農民の努力によって、公社化以後、農業生産は顕著な増進を示した。商品として売り出される蔬



菜の生産高は1963年に125,000トンで、高級社の時代に比し1.6倍の増加にあたり、果物の生産高は1963年に1,900トンで、高級社の時代に比して50倍を増加した。果物の生産は公社化以後大いに拡張せられたものである。公社化以前は果樹を栽培する余裕がなかった。けだし果実の収穫には栽培を開始してから時間がかかり、投資の効果をおさめるのに長い時間がかかるからである。公社化ののちには、生産の増進により資力に余裕が生じたのである。

生産の増加にしたがって社員1人あたりの収入がふえた。1963年に、公社全体の収入は1,310万元に達したが、これは高級社の時代に比し89%を増加したものである。63年における社員1人あたり平均労働力に対する配当は年600元であった。目前の状況のもとにおいては、農民の生活水準は高くはないけれども衣食については余裕がある。社員の支出は少なくてすんでいる。家賃や水道料の負担はなく、野菜も自留地から採っている。農民の生活費は1人あたり月6—7円で足りる。現在、50%以上の農家が貯蓄している。この公社に電燈がついたのは1960年のことで、現在、農家の60%がラジオをもち、その70%が自転車を持っているという。

衛生についていえば、病院1所、診療所1所があり、医者は32名いる。

文化生活についていえば、小学校17所があり、適齢児童は全部入学している。初級中学は4所ある。公社に巡回映写隊があり、各生産隊では週に1回は映画を見ることができる。

この公社の場合には、基本的経済計算単位は生産大隊である。公社の管理委員会は各生産大隊からそれぞれの総収入の12%を納めさせ、かくしてえた資金をもって大規模な生産建設を行ない、またおくれた生産大隊に援助をあたえている。公社直営の経済事業は蔬菜を中心とした多角経営、実験ステーション、機械修理工場、大規模灌漑事業などで、各生産大隊が経営する事業は蔬菜、果物の栽培、食糧生産、豚の飼養、小型の農機具工場、副食品の加工工場、各大隊の範囲内の灌漑事業などである。生産大隊が基本的経済計算単位であっても、具体的に生産を組織して実行しているのは生産隊であり、したがって生産大隊はその所属の各生産隊に対し三包一獎四固定の制度を実行している。

公社直営の機械修理工場を見学したが、1959年の成立で、従業員140人。信用社の金庫を製作し、脱穀機やトラックを修繕していた。また公社直営の温室栽培場を見た。標札には「東再村大隊温室生産隊」と記してあった。1,100間（1間は12尺平方）の広さがあり、80間を

6人の社員が責任をもって管理している。見学したときには、トマト、きゅうり、とうがらしなどが栽培されていた。温室内の各所に豆炭を焼く炉があり、そこから土管を伝って室内に熱をおくように装置してあり、日中摂氏25—6度、夜間22—3度に保たれている。室内の各所に小便つぼが見えた。但し温室では化学肥料をも用いるとのことであった。なお、寒冷を防ぐ「むろ」が設けられ、その中にすでに収穫した白菜などが貯蔵されているのを見た。

この公社で生産せられた蔬菜は予約注文により国营蔬菜公司に売却されている。

公社には信用社があり、各大隊には信用分社があり、農民の貯蓄はこれらに預け入れられる。公社化以前には、公社は信用社から資金を借りたことがあるが、現在は借りていない。

この公社にも自留地があるが、自由市場はない。この点、次節において再び論及する。

#### ㊤ 上海市上海県塘湾人民公社

この公社の農家数は4,697戸、人口は20,170人で、労働力は10,386個、耕地は1,790ヘクタールで、12の生産大隊、128の生産隊に分かれている。黄浦江に面している。1958年、14の高級農業生産合作社の合併によって成立した。

この公社の大熟と小熟のそれぞれの生産額において各種の農産物の占める比重を示せば次の通りである。大熟については、米（おくて）54.1%、綿花26.0%、米（早稲）5.2%、飼料5.4%、黄豆1.7%、蔬菜7.6%である。小熟については、大麦・小麦29.3%、油菜28.6%、蔬菜7.4%、蚕豆5.7%、緑肥29.0%である。これによってみれば、この公社はかなりの程度において食糧の生産に重点をおいていることがわかる。

水利建設ないし農業の電気化、機械化の一斑は次の通りである。大型トラクター7台、電力による灌漑ステーション21個、井戸にすえつけた電気灌漑用のポンプ43個、小型トラック2個、木船多数、脱穀機240台をもっている。排水溝が35万立方メートルある。灌漑の98%は電気により、耕作の80%は機械化している。またこれにより打つづく自然災害を克服してきた。

公社直営の工場には、木造船製作工場（最大80トンの船が製作されている）、農機具製造工場、竹細工工場、製材工場、鋸製造工場等がある。

この公社の生産増進の状況を示せば次表の通りである。



塘湾人民公社の生産増進

	食糧生産	綿花生産	蔬菜生産	豚の飼養
単 位	1ヘクタールあたり キロ	1ヘクタールあたり キロ	1ヘクタールあたり キロ	頭 数
1950年	3,990	202		1,900
1957年 (高級社時代)	5,370	435	28,000	5,500
1964年	7,900	810	71,000	12,800

備考 (1) 蔬菜の生産は1957年よりはじまる。  
(2) 1964年の豚の飼養数は11月までの数字。

この公社が多角的生産に努力してきたことは上表の野菜の生産や豚の飼養によってもうかがわれるが、この側面においてさらに付加すべきものは養魚（淡水魚）である。養魚池（魚塘）の面積は177ヘクタールにおよび、1964年に市場に売った魚の重量は50,000キロに達した。1957年（高級社時代）にはこれは15,000キロであった。生産の増進にともない農民の収入も増加した。社員1人あたり年収入（集団生産によるもののみ）は1950年98元、58年210元、64年410元を示している。このほかに自留地の経営から64年には1家族あたり80元前後をえている。農民の70—80％は貯蓄している。この公社全体の社員で1,300台の自転車をもっている。

この公社には小学校21所、農業中学1所、初級中学1所、小さな病院1所、衛生院3所があり、また各生産隊に保健ステーションがある。

この公社の基本的経済計算単位は生産隊である。

公社の幹部は1年に6カ月は労働にしたがい、生産大隊の幹部は基本的に労働している。

3. 若干の考察

1963年11月、廖魯言農業部長が語ったところによれば、中国の農村には74,000あまりの人民公社がある。中国の農家の数は1億2,000万余であるから、人民公社1社あたりの農家数は平均して1,600余戸となる。この平均農家数に比べれば、私がみた4つの人民公社は比較的に大規模なものであるといわねばならない。すなわち新滬人民公社は11,000戸、塩歩人民公社は15,425戸、中保友好四季青人民公社は8,000戸、塘湾人民公社は4,697戸である。このことと私が見たのは都市に近い公社であること、そしておそらく外国人の参観に供しうる選ばれた公社であろうことは、まず頭に入れておかねばならぬところである。

したがって、建設事業の発展、生産の増進、社員収入の増加等の点において、これらの4つの人民公社が立派な成績をあげているからといって、すべての中国農村の

人民公社がかならずしもこのように良好な成績をあげているわけではないであろう。しかし少なくとも優秀な人民公社はよく自然災害に打ち勝って、公社のねらっている目標を十分に達成してきていることは明らかである。

以下、叙上の4つの人民公社を見学してつかんだ二、三の問題点について若干の考察を試みる。

第一に、4つの人民公社のうち、3つのものは、生産隊をもって基本的経済計算単位としており、北京郊外の中保友好四季青人民公社のみが生産大隊を基本的経済計算単位としている。農村人民公社の調整過程において、1962年の初頭ごろを境として、公社の基本的経済計算単位が生産大隊から生産隊に移行しはじめた。そして現在なお、生産大隊を基本的経済計算単位としている公社はごく少数であるといわれるが、四季青人民公社はまさにそれに属しているのである。

第二に、共同食堂、託児所、幼稚園、養老院（敬老院）等の福利施設は私自身の従来の文献的調査では、人民公社に当然、経常的に設けられるものとして理解されてきたが、実際はかならずしもそうではない。まず共同食堂は農繁期にかぎって臨時的に設けられることになっている。広東省南海県塩歩人民公社の場合について述べれば、共同食堂は平時には設けられず、農繁期のみに設けられるが、そのときには各自の食糧を持参して共同して炊事するのである。この場合、燃料費は各自が分担し、炊事員の給与は生産隊が負担する。しかもこの共同食堂に参加する者は夫婦2人が仕事に着いて、家庭に老人がいらないような者にかぎられている。公社設立以来この方式を採用してきており、かつて現物給与の支給を要求する者があったが、断乎、これを拒絶してきたという。北京郊外の中保友好四季青人民公社で聞いたところでは、共同食堂は農繁期に社員の要求にもとづいて設けるが、また豚の集団飼養や建設事業の遂行の場合にも設けられるという。託児所と幼稚園については、経常的に設けるものと農繁期のみに臨時に設けるものとの2種のケースがある。前者の方式をとっているのは広州郊外の新滬人民公社であって、他の3つの公社はいずれも後者の方式によっている。新滬人民公社には託児所95所、幼稚園33所があり、いずれも料金をとっており、一部分は生産隊が補助している。これらは若干の生産隊が集まって経営しており、託児所は日託である。後者の方式をとっている場合でも、老人のいる家庭などでは必ずしも託児所を利用しない。養老院についても、その設けのある公社とない公社とがある。広東省南海県の塩歩人民公社には養老院があり、身寄のない老人が入る。広州郊外の新滬人民公社では生産大隊のなかに養老院のあるものとなないものがある。北京と上海のそれぞれの郊外の他の2つの



公社には養老院が設けられていない。いずれの人民公社でも、労働力が少ないためかあるいはその他の事情により生活に困難のある家庭に対しては、五保制（衣、食、住、病、死の五つを保証する制度）により生産隊が責任をもって面倒をみており、補助金が支給されている。

第三に、自留地と自由市場の問題がある。広州郊外の新滘人民公社では、自留地として1世帯あたり0.25華畝を認めており、北京郊外の中保友好四季青人民公社では、自留地として全体の耕地の5%をあて、1人あたり0.05華畝をゆるしている。上海郊外の塘湾人民公社では、自留地として全体の耕地面積の7%をあてており、1人あたり0.08華畝をゆるしている。広東省南海県の塩歩人民公社では、自留地として全耕地の3%以上4%近くをあて、1世帯あたり0.15華畝をゆるしている。中保友好四季青人民公社と塘湾人民公社の場合には、各農家の建物に接近して各自の自留地があるのに対し新滘人民公社と塩歩人民公社（両社はいずれも広東省に所在する）の場合には、一つの部落に近いところ（かならずしも接近したところではない）に、その部落に属する各農家の自留地がまとめられていた。これが一般に華北ないし華東に対する華南の自留地に関する対照的な形式として認識しえられるかどうかはなお吟味の余地があるが、興味のある相違点であることにはかわりはない。かような相違はそれぞれの地方における農家の構造や灌漑の便の如何などから生じたものであるようである。自留地では一般に野菜や家畜の飼料などが栽培せられ、豚、鶏、あひる、鶯鳥などが個人的に飼養されている。新滘人民公社の場合には豚は、各農家に1頭以上飼養せられ、塩歩人民公社の場合には、豚は各農家に2頭の割合で飼養されている。これら2つの華南の公社の場合には、養豚や養鶏には集団飼養よりも個人飼養が重視されていた。またこれらの華南の公社では5日に1回（例えば新滘人民公社の場合には、4の日と9の日に）自由市場が立つ。塩歩人民公社の場合には、公社の会堂の前とほかに2カ所で自由市場が開かれている。中保友好四季青人民公社では自由市場は開かれえないという。なお、塩歩人民公社を参観した折に、「農貿市場」なるものを見た。これは空地を利用して臨時に開く自由市場とは異なり、あたか

も都市に設けられている公設小売市場と同様な姿を呈している。すなわち特定の市場としての建物（それは公社の集団的所有に属する）の中に、国営商業、公私合営商店、合作商店、公社の大隊あるいは生産隊が列んで店を開いているのである。

第四に、墓地の問題がある。旧中国では人が死ぬと易者（風水先生）に頼んで何処に棺桶を埋めるべきかを占ってもらったものである。風水先生が判定を下してこの方角のあの場所がよいということになると、人々はそこに自分の田地、田畑があるかどうかにかかわりなく、換言すれば、そこが他人の土地であろうとも、棺桶を運んで行って埋めてしまったものである。そこで中国の田畑には棺桶を土で蔽った土の山が沢山に見られたものである。かようなことは貴重な耕地の利用を妨げるものとして解放以前から識者によって指摘されてきたものである。解放後、これらの墓がどうなったかは私の一つの関心事であった。今度の旅行で京漢線をくだり、夜が明けて見た駐馬店以南の河南、湖北の鉄道沿線において、武漢の郊外において、鄭州から徐州までの鉄道沿線において、さらにまた上海の郊外において旧態依然たる墓の集団を見た。農業の合作化、人民公社化を経て、土地の所有や経営の集団化がすすめられてきた以上、そこに土地の合理的利用が真剣に考慮せられ、実行に移されたはずであるが、さすがに既にある墓地に対しては、農民が祖先をうやまい、故人の霊を畏敬する心理を顧慮して、農民が納得しないかぎり、軽々しくこれを動かさないかったのである。

思うに、中国の農村には、農業の機械化、電氣化の推進において、肥料問題の解決において、水利建設の発展において、さらには農業科学の研究と応用において、なお多くの為すべきことが残っているように思われる。しかしこれらの問題は指導者と大衆によって十分に意識せられており、その解決へとその歩をすすめつつあるのである。人民公社の組織と運用についても、一時は行きすぎがあったが、錯誤の発見とともに調整を受け、かなり伸縮性をもつ社会組織となっている。中国農村人民公社の前途は多難ではあるが、しかし希望があると私は見た。（1965年2月25日）



## モスクワとレニングラードの図書館管見

吉 田 金 一

バルトリドの「欧州殊に露西亜に於ける東洋研究史」の翻訳をみると、各章の終りには参考文献が列記してある。スカチコフのビブリオグラフィヤ・キタイヤには、驚くほど多数のロシア文資料がならべてある。戦前でも戦後でも、これらの書目を見た人は、日本でこれだけの文献を利用して研究できようとは思わなかったにちがいない。果してソビエト連邦がマイクロフィルムにして文献を送ってくれるであろうか。私も半信半疑で頼んでみた。1960年、頼んでから2年近くたって忘れたところに、2巻のマイクロフィルムがモスクワのレーニン図書館から届いた。パントイシュ・カメンスキーの「ロシアと中国の外交資料集」と大蔵省関税局の「彙報」であった。それに東洋文庫所蔵のコルサクやノスコフのキャプタ貿易関係の著作を利用して一応「ロシアと清の貿易について」をまとめてみたが、資料の不足は蔽うべくもない。というのは、そのあと頼んでみたが、梨のつぶてでマイクロフィルムは送ってこないのである。

そこで直接ソビエト連邦に行って資料を集めたいと思って計画を進めたわけである。レニングラードに一年間留学したマンコール氏は、図書館に行ったら直接頼めば一週間もあればマイクロフィルムをつくってくれるというので私はよろこんだが、ソビエト事情にくわしい日本人たちはみんな首をかしげるので、私としてはまさに一喜一憂である。ソビエトの科学アカデミーと連絡でもとれて入国するなら話は別であるが、私のばあいは単なる旅行者として入ソしようとするのである。ある日本人はいう。「果して図書館に入館させてくれるであろうか」と。また「イントゥーリストが観光日程をつくってしまうから、勝手に毎日図書館通いをするのを許すまい」という日本人もあった。それで私は東京のソビエト大使館で文化アタッシュェのチェルノフ氏に会い、口頭あるいは文書をもって援助方を依頼した。ちょうどミコヤン氏の訪日前後であったので、無駄足をふんだりもしたが、チェルノフ氏は援助を約してくれた。東大の山本達郎教授からは科学アカデミーのゲーベル氏あて依頼状を書いていただいた。以上の二つは、具体的にどのように役立ったかはよくわからないが、はっきり効果のあったのは、東洋文庫の宇都木章氏からモスクワおよびレニングラードの主要図書館の館長あてに送っていただいた依頼状と私が

携帯した同氏の書翰である。というのは東洋文庫は、モスクワおよびレニングラードの主要図書館と盛んに図書交換を行っており、そのためにその依頼状や紹介状がものをいったのだと思う。どの図書館でも、「依頼状が来ている。よろこんで援助する」といつてくれたが、それはすべて東洋文庫からの依頼状を意味していた。

出発に先だって、スカチコフのビブリオグラフィヤ・キタイヤの新版によって、私が必要とする書名を複写したり、書きぬいたりした。スカチコフの著書そのものを持って行けば一番よいわけだが、重いので敬遠した次第である。結果としては複写の写真を三部作って持って行ったのがたいへん便利だったし、とくに定期刊行物の論文や記事が散在しているのを、各定期刊行物ごとにまとめて整理したのが、書庫に入って検索するときにひじょうに役立った。そのほかカーボン・ペーパーと和紙も、提出書類の控えをとるのに役立った。

8月7日にモスクワ近郊のシェレメチエボの国際空港に降りたが、イントゥーリストの案内人は、ホテル・ウクライナに行けと行ってタクシーを世話してくれただけで、通関や入国手続きについてはいっこう構ってくれないので、室内の狭さも手つだって、意外に時間がかかった。ホテルについてもフロントで部屋が示されただけでクーポンもくれない。翌日ホテル内のイントゥーリスト事務所に出席して宿泊と食事の25日分のクーポンを受けとったが、日数計算をまちがえて20日分しかよこさなかったもので、書類をみせて追加してもらったりした。事務が不確実であると思った。

イントゥーリストから派遣されてきた通訳はアントノワ・タマラ夫人で、今年大学を卒業したばかりである。日本語はたいして上手でないが、親切にせわをしてくれた。彼女の私に対する最初の質問は、「吉田さんは今までにソビエトに来たことがありますか」であった。いっしょに歩いていると、たとえば私の支持する政党とか、私がどの政党にも所属していないと答えると、その理由などを尋ねた。日本の物価などにも興味があるらしかった。

最初に私はタマラ夫人に、私のソビエト訪問の目的を話して援助してくれるよう頼んだ。モスクワの三つの図書館をあげて、それへの入館とマイクロフィルム作成を



希望した。案ずるより産むが易しで、この後帰国するまでどの図書館もどの研究所も、私に門戸を開放してくれた。タマラ夫人は時としては私の助手のようにして手伝ってくれたし、私が本をみつけてよろこんでいると、彼女もいっしょによろこんでくれた。見学についても、ヤスナヤ・ポリヤナのトルストイ邸やザゴルスクのギリシア正教寺院など、私の希望に従って案内してくれた。そしてモスクワでもレニングラードでも見学の日程を私に強制したりしたことは一度もなかった。

8月10日に、はじめてヴェ・イ・レーニン名称ソ連邦国立図書館（Государственная Библиотека СССР имени В.И. Ленина）を訪れた。入口の右側に相談室兼受付があって、一切の事務・苦情・相談をさばいている。国際交換部長カネフスキー氏に面会を申入れると、助手が通行証を持って迎えにきてくれた。カネフスキー氏の事務室はたくさんの事務室を通りぬけた一番奥の方で、このあとも何度か訪れたが、いつも親初に、しかもテキパキと私の依頼を処理してくれた。同氏は数年前、日本にも来訪した由である。用件をすませて玄関にもどり、こんどは左側の事務室の窓口で旅券を提示して、入館証をもらった。入館にあたっては一切の荷物を預けなければならない。辞書もいけないといわれた。困ったなと思ったが、閲覧室には露和辞典も備えつけてあったので助かった。この図書館には閲覧室が22あるという。私は1号室に入れられた。目録室はちょうど東大図書館のように階段をあがって両側にあり、左側が著者名目録、右側が分類目録である。ここにある目録は欧文図書のみだけであった。そのほかに複写を許さない、学位論文の目録などもその一角においてあった。たくさんの館員が常にカードの整理をしているせいか、実によく整備されており、間然するところがないという印象を受けた。検索の困難な本について、傍の机に座っている婦人の館員に質問すると、すぐにみつけてくれた。このカードの特色は、同じ本にいくつもの番号があることである。たとえばグバレヴィッチ・ラドビルスキーの「茶と茶の専売」という本にはU $\frac{29}{12}$ , U $\frac{412}{118}$ , C $\frac{50}{29}$ と三つの番号が記載されている。閲覧票にはその全部を記入することになっている。現に閲覧票には、番号記入欄が6欄設けられている。私の経験によれば、約30冊の本を請求したところ、洩れなく借覧することができた。すなわちここでは、同一の本を何冊か所蔵しており、それを別の番号で分類しているものと推測される。本を請求してから、これが出るまでには相当時間がかかる。朝9時に請求して、出るのは12時30分といわれた。従って私は前日の夕方に請求することにした。そうすると翌朝には借覧できた。なお借覧した本を、翌日に継続して借覧する

ためにとっておいてくれるのはいうまでもない。

私は8月10日から13日までの4日間で34冊の本を選んでマイクロフィルムの作成を頼んだ。スカチコフのビブリオグラフィヤ・キタイヤに載っているめばしい本を、片っぴしから当ててみたが、やっぱりない本が相当あった。あとから感じたことであるが、帝政時代の図書は、レニングラードの方が揃っているようである。なおここで頼んだ本は全部スカチコフに載っているものである。

マイクロフィルム係の室は、裏の別棟にある。一旦玄関を出て図書館を半周して裏門から入る。旧式のロシア風の家屋がそれである。書類は二種あって、一つは注文書で、一つはBOと書いた閲覧票に似た紙片である。このBOは一枚に一冊の本を書くが、依頼者の氏名は記入しない。マイクロフィルム係が、依頼された本を書庫から借出すための伝票に使われるのであろう。注文票には、「別記の原本から、写真コピー、ネガティブ・マイクロフィルム、ポジティブ・マイクロフィルムの作製をお願いします」とあり、裏面に書名の記入欄がある。このような書類の形式が完備しているのはこの図書館だけで、他の図書館は適当な用紙に書いて提出すればよかった。マイクロフィルムの値段は、ネガで1コマ2コペイカ（邦貨8円）、ポジで3コペイカ（邦貨12円）で、この値段は他の図書館でも変りがない。注文してから出来あがるまでの日数は、レーニン名称図書館でも、サルティコフ・シチェドリン名称公共図書館（レニングラード）でも、ともにほぼ2ヶ月ということであり、ロシア人の注文書が相当多いように見受けられた。

私はここでロシア帝国法令全集（Полное Собрание Законов Российской Империи）全部のマイクロフィルムを日本に将来したいと思い、その値段をカネフスキー氏に調べてもらった。周知の通りこの法令全集は第一集、第二集、第三集とあり、1649年から1915年までのロシア帝国の法令が全部収録されている。冊数は合計224冊で、マイクロフィルムにとった場合109,448コマにものぼり、1コマ、ポジ3コペイカと計算して3282スルーブル、邦貨1,312,800円となる。帝政ロシアについて研究しようと思うばあい、この法令全集はなくてはならないものだと考えられるので、ぜひ一本を日本のいずれかの図書館に備えたいものである。これがないと、日本では帝政時代の場合については、すべて孫引きとなってしまうであろう。

レーニン名称図書館の地階には、大きな食堂があって盛んに利用されていた。セルフサービスで、カフェテリア式であった。どうも口にあいそうもないので、私はあまり利用しなかったが、どれも分量と栄養はたっぷりあるように見受けられた。

は運動  
巻は運  
国借  
の間は  
保路同  
るまで  
におい  
革命党  
果をさ  
じめに  
に引用  
げられ

雲南貴  
中  
北  
雲南  
料には  
志傲国  
世凱之  
「昆明  
録や当  
編」の  
「永昌  
容は次  
雲南辛

雲南  
雲南  
辛亥  
雲  
勸  
武  
告  
同盟  
昆明  
雲南  
雲南  
張文  
大理  
蔡鏐  
竜陵  
迤西  
宦滇  
雲南  
雲南  
貴州辛



この図書館は増築工事中のようであった。入口には門も何もなく、通りに面して玄関がある。向って左の、クレムリン側に板囲いがあって工事をしていた。朝この図書館に行くと、下のクレムリンの城壁の外側に、男女の行列がみられた。何だろうと思っていたが、それが例のレーニン廟に参詣する市民たちの長い行列の一部であることを、あとで知った。ホテルから図書館へは、バスかトロリーバスで通ったが、朝と夕方はやはり満員で、乗るのにも一苦勞であった。バスの停留所の近くに、日本と同じようにして街頭で宝くじを売っているのは興味深かった。

レーニン名称図書館は一応片づいたので、8月14日に(ロシア共和国)国立公共歴史図書館(Государственная Публичная Историческая Библиотека)を訪れた。この図書館を推称する日本人もあったが、思ったより規模の小さい図書館で、私には期待はづれであった。館長はクラヴディエヴァ夫人で、好意をもって迎えてくれ、わざわざ自分で極東関係の特別閲覧室へ案内してくれたりした。閲覧室は学校の普通教室くらいの広さで、隣りあわせて書庫があったが、蔵書数はさほど多くはなく、邦文図書もせいぜい2,000冊ぐらいで、東洋文庫出版の図書と大日本古文書が揃っているほかは、満州興業銀行の蔵書印のある満州関係の図書や大正年間の大杉栄のものなどがあり、学術的なものはあまり見受けなかった。私のみたいロシア文資料は、カードがあっても書庫にはないといってことわられた。どうも管理は不十分のようである。

翌日行って一冊、自分のカメラで撮影させてもらった。ここには複写の設備がないためである。その際は閲覧室の一隅を使ったが照明が悪いのでうまく行かなかった。なおそのときマイクロリーダーで読んでいる婦人がいたが、ちょうど写真屋が黒い布をかぶるように、頭からすっぱり黒い布をかぶっていた。そして何かいろいろと館員に注文をつけていた。

歴史図書館というからには、恐らくロシア文の歴史関係図書は充実しているのであろうが、私に必要な本はあまり充実しているとはいえなかった。

8月14日の午後、アカデミー・ナウク図書館〔正式名称はソ連邦科学アカデミー・ヴェ・ペ・ヴォルギン名称社会科学基本図書館 Фундаментальная Библиотека общественных наук им. В.П. Болгина Академии Наук СССР〕を訪問した。この図書館は、レーニン名称図書館のすぐ裏にある。館長のシュンコフ氏は月曜日しか来ないので、副館長と交換部長に面会したが、両方とも婦人であった。規模はレーニン名称図書館にはもとより及ばないが、社会科学関係図書は相当に充実してい

るようであった。受付にせよ、カタログ室にせよ、まことに手狭まで、著者名目録のごときはせまい通路にならべてある始末であった。マイクロフィルム係は書庫の一隅に机を二つほどおいて、二人の婦人が仕事をしていった。携帯品預かり所も、さほど嚴重でなく、家庭的な雰囲気であった。地階には食堂があったが、菓子などをおいしく食べさせてくれた。

私はここで分類目録によって、スカチコフのビブリオグラフィヤ・キタイヤに載っていない本を4冊と、載っているがレーニン名称図書館にも歴史図書館にもなかった本を2冊みつけてマイクロフィルムを頼むことができた。ありがたいことにはこの6冊分のマイクロフィルムを、私の帰国までに間にあわせてくれた。マイクロフィルム係の婦人は最後まで親切にせわをしてくれたので、私は心から謝意を表したが、彼女は「あなたはもうモスクワに来ることはないでしょうね」と言った。私は「また来ますよ」と答えたが、あるいは二度と行けないかもしれないし、再度訪ソしたところで彼女がその職に留まっているかどうかかわからない。これだけ親切にしてくれたのに名前もきかず礼状一本書けないのは相すまないと思っている。

閲覧室には入ってみななかったが利用者はそんなに多くないようであった。アカデミーナウク関係の図書館で、一般の人があまり来ないためかもしれない。カタログをみているのも、私のほかに一人か二人がいたりいなかったりという状況であった。和漢の書籍についてはわからなかった。

8月28日にはモスクワのアジア諸民族研究所の図書館(Институт народов Азии Академии наук СССР)をみせてもらった。夏休みのためどこへ行っても学者にはなかなか会えなかった。この研究所でもチフビンスキーなどの中国史関係の人には会えなかったが、日本関係の室でスタジニチェンコ、ポポフ、パドパロヴァなどの諸氏に会うことができ、私の研究や日本の学界の諸事情、東洋文庫などについて質問されたのでこれに答えた。パドパロヴァ夫人の日本語は巧みであった。この日本研究室のフェティソワ夫人の案内で、付属の図書館をみせてもらったのであるが、カタログによるとこの蔵書は革命後のものが主で、帝政時代のものは至ってすくないようであった。従って私はとくに必要なものを発見することができなかった。カタログには、日本文のものもあったので一瞥したが、3,000冊程度であろうか。そして必ずしも基本的な本が揃っているようには思えなかった。従って日本研究の専門家は、別に日本関係の図書を所蔵しているのではないかと想像される。

パドパロヴァ夫人の質問の一・二を紹介すると次の通



りである。「ソビエトでは研究計画が示され、これに従って研究を進めるが、日本ではどうか」。という質問に対し、「研究計画は自分でたてる」と答え、「研究費はどうか」という質問なので、「申請すると学術会議が審査をして、パスしたものに研究費が支給される」と答えた。さらに「もしパスしなかったら、どうして生活するのか」というので、「研究者は大学などに籍をおいているので、その俸給で生活できる」と答えたところ、うなづいていた。スタジニチェンコ氏は Far Eastern Economic Review の記事にある、日本人の海外旅行における外貨制限の問題についていろいろ質問したが、私には 500 ドルの制限があるということを知っているだけで深いことはわからないので困ってしまった。東洋文庫については、その歴史と現状について説明を求められたので、モリソン文庫以来の沿革と、戦後国会図書館分館となっていることを概略説明しておいた。

この研究所の玄関には図書販売店があり、科学アカデミー関係の新刊書を扱っていた。ズラトキンのジュンガル汗国史をみつけたのはここである。私の探している本がこの売店で品切れになっていたところが、売子が「隣が出版所になっているからそこへ行ってみよ」と言った。そこで出版所へ行ってみると戸棚から無雑作に数冊を出して「売店へ届けてくれ」という。アカデミーナウク関係の出版所のようにであったが、規模はそれほど大きくなかった。

以上がモスクワで訪問した図書館であるが、そのほかにモスクワ大学の付属図書館があるけれども、これは不便なところにあるので行かないでしまい残念に思っている。そのほかにモスクワにはソビエト連邦外務省アルヒーフ局ロシア外交アルヒーフ (Архив Внейшний Политики России Архивного управления МИД СССР) がある。革命前はたとえば仏人の Cahen などここの資料を使っているが、革命後はあまり外国人には公開していないようである。ソビエトの学者の著書には盛んに使われているが、ソビエトに留学した外国人学者も、講師として招かれた外国人学者も見せてもらえなかったという。英国では 100 年以上前の外交文書は公開している由である。ソビエトでもその程度であれば外国人に対しても公開できないものであろうか。最近レザノフ関係のアルヒーフを調査したソビエトの学者の談によれば、それだけでも積めば等身大の資料があり、まだ世に知られぬものもあったという。中国や蒙古関係のものも貴重な資料があるにちがいない。ソビエトの学者の中にも、日本大使館の紹介状をもらって訪ねてみたらどうかという人もあったが、日程がいっぱいで、ついにあきらめてしまったのは残念である。もしこれを見ることができな

ら、もう一度ぜひモスクワを訪れたいと思っているので、これを公開してもらおうための努力をおしんではならないと思う。

私はモスクワに滞在すること 12 日でレニングラードに赴き、ここに 8 日滞在した。交通公社には 7 日のつもりで依頼したのが手違いで 1 日のびて 8 日になったのであるが、今から考えると 1 日でものびてよかったと思う。帝政時代の資料は何といってもレニングラードが揃っており、見るものも多いのである。飛行機で 1 時間とすこしで昼前にこの町につくと、午後はコロブコワ・リータという、昨年レニングラード大学日本語科を卒業したという娘さんが通訳としてやってきて、千葉大の小池新二教授といっしょに郊外のピョートル宮殿に有無をいわさずつれて行かれてしまった。私は事情を説明して翌日からは私の専属の形で図書館の案内をしてもらったが、リータ嬢は勝手を知ったところなので能率よくひきまわしてくれ、モスクワのタマラ夫人と同じように、私の仕事を手つだってもくれて大いに助かった。もっとも日本語はそれほどでなく、日本語科の教授であったペトロワ夫人が上手な日本語で、「あの娘は器量自慢で、勉強の方は怠けてばかりいるので、しよっちゅう叱っていました。イントゥーリストあたりの通訳向きでしょう」と言っていたので、さもありなんと思った。

レニングラードの諸図書館は近いところに集中しているので都合がよい。まず公共図書館 (正式名称はエム・イエ・サルティコフ・シチェドリ名称国立公共図書館 Государственная Публичная Библиотека им. М. Е. Салтыкова-Щедрина) を訪問した。最初フォンタナ河岸にある分館に行ったが、そこは東洋関係の図書室だけを見て、すぐに本館に行った。本館はネフスキー通りとサドワヤ街の角にあり、よく 1917 年の 7 月事件のときデモを射撃している写真があるが、あの正面に見える建物がこの図書館である。1814 年創立で、今年 150 周年の記念行事を行ない、「300 万巻をかぞえる、世界でもっとも完全なロシア語図書のコレクション」を誇っている。その誇りを私は至当だと思った。というのは私はここで館長と交換部次長 (ともに婦人) に会い、モスクワでみつからなかった 6 冊の本のリストを提出したところ、明日来るようにとのことであった。翌日行ってみると閲覧室に案内されて、私の見たい本が運ばれてきた。こうして私はスカチコフのビブリオグラフィヤにあって私が見たいと思った本をすべて探しあてることができた。まさに「完全なロシア語図書のコレクション」というべきである。聞くところによると、帝政時代からロシアには納本を義務づける制度があり、この図書館はその納本を受入れる図書館の一つであったという。これがこ



の図書館が充実している理由であろう。ここではマイクロフィルムについても特別の配慮をしてもらって感謝している。その6冊の本の複写をマイクロフィルム係に頼んだところ、8月21日に頼んで8月25日につくってくれた。頼みにくるソビエト人には「2ヶ月かかる」と答えて、私には「こういう状況だから、あなたのばあいは特別ですよ」と説明した。私が出国の際に必要なかもしれないから証明書が欲しいという、それもわざわざつくって付けてくれた。

その次に訪れたのがレニングラード大学の東洋学部である。通訳のリータ嬢の出身学部であるから、図書館関係者もみんな顔見知りで、万事好都合であった。東洋学部の図書館の館長はザビストビッチ氏でイラン語専攻である。館長室にはちょうど中国史専攻のパンクラトフ氏があり、小川環樹教授が先日来られたといていた。館長室の前には山のように本の小包が積んであり、館長は「これは林基の本で、日本に送るのだ」といていた。図書館事務室で分類目録を調べると、スカチコフのビブリオグラフィヤにないものがある。見たいと思う本を頼むと、館長自ら書庫から出してきてくれるのには恐縮した。なかにはみつからないものもある。書庫を見た人の話によれば、整理はあまりよくないそうである。この図書館には抜刷のようなものが比較的よく保存されているような印象を受けた。結局スカチコフにない本を4冊、ある本を4冊と計8冊、マイクロフィルムを頼むことにした。館長は8月25日までにつくってくれるというので、私はその日の日記に、「まことに幸福な一日であった」と書いた。ところがこの図書館の分は帰国に間にあわなかった。最後には館長が不在で会うことができず、そのあと電話で話をし、あとで送ってもらうことにして宛名を届けた。この図書館では日本との図書交換を希望し、私と前後してここを訪問した衛藤潘吉氏にもその旨を述べた由である。私の頼んだマイクロフィルムが無事に届き、日本との図書交換もこの図書館が希望する通りに円滑に運ぶことを願うものである。

8月21日にはレニングラード大学付属図書館(正式名称はジュダノフ名称国立レニングラード大学エム・ゴルキー名称科学図書館 Научная Библиотека им. М. Горького при Ленинградском Государственном Университете им. А. Жданова)と科学アカデミー図書館を訪れた。

前日訪ねたレニングラード大学東洋学部の東隣に、ネワ河に面してレ大の付属図書館があった。途中で長いロビー風の室があり、そこに本大学が産んだ高名な学者の肖像や彫像が壁面を飾っており、ちょうど新学年前だったので、たくさんの新入生らしい男女の青年が手続きを

とっていた。中に軍服姿の青年が相当たくさんいるのが目をひいた。

一番奥にある付属図書館では館長が不在で、交換部長のテトニエフ氏に会った。同氏は東南アジア諸国の出版物がなかなか手に入らないといていた。カタログはよく整理されており、ここでスカチコフのビブリオグラフィヤにない本とある本と各1冊計2冊のマイクロフィルムを頼んだが、帰りにテトニエフ氏は、2、3年前に依頼をうけたロシア文図書のマイクロフィルムを最近東洋文庫へ送ったと語った。話の様子から、私がかつて頼んだものではないかと思われたので目録をみせてもらいたいと申出たが、それが見当らないので確かめることができなかった。私は重複するのを恐れてすぐに当時の控えを照合してみたが、重複しているものは比較的すくなかったので安心した。帰国したあとにその現物が到着したがやはり私が頼んだもので、調べてみると私の頼んだもののうち学位論文らしいもの1つを残してそのほか全部のマイクロフィルムが届けられたわけである。その冊数は大小あわせて20冊におよんでいる。私は心から感謝するとともに、私の依頼が「梨のつぶて」になっていると思っていた、その不明を恥じた。それにしてもソビエトという国は親切ではあるが、時間の上ではのんびりした国だと思う。

同じ日にレニングラード大学の隣の奥まったところにあるアカデミーナウク図書館にも行ってみた。館長のフィリポフ氏が不在なので副館長モイセエワ女史に会ったが、きびきびした口調で説明したり、案内したりしてくれた。革命当時この建物は野戦病院の建物であったのを、レーニンの特別の命令で図書館にしたという来歴を語り、交換部長を呼んでくれた。私が行ったというのを聞いて、那波利貞先生の「唐鈔本雜鈔考」と川口久雄氏の「李商隱雜纂と清少納言枕草子について」が欲しいと言ってくる人もあった。東洋学の研究が進められていることは、その特別閲覧室の様子からも推測された。基本的な漢籍が四周の壁面にならべてあった。その中に満州国版の清朝実録の真新しいのがあった。私が探している本が1冊あったのでその複写を頼んだが、これは最近手許に届いた。ここへは翌日も行ってその本をしばらく読ませてもらったが、その特別閲覧室にはレニングラード大学の日本語科の学生らしいのが閲覧しておった。

8月22日に私はレニングラードのアジア民族研究所を訪問した。ペトロワ・オリガ・ペトロウナ夫人を訪ねたところ、日本語の上手なゴレグリヤド氏が迎えに来て、ペトロワ夫人は休暇が明けて帰宅したばかりであるが、まもなくここへ来るということであった。その研究室は日本・朝鮮・中国の研究者が集まっており、休暇中のた



め、いる人はいつも2、3人に過ぎなかった。その中でいつも居って親切に世話をしてくれたのが、中国古代史のクローリ氏であった。司馬遷に関する論文の抜刷を出してきて、栗原朋信氏に渡してほしいと私に頼んだ。私がソビエト科学アカデミーの世界史を翻訳したところ、あの中国古代史の部分はモスクワが書いたのであるが、最近これに対する批判が盛んに行なわれているという、クリューコフの「殷における国家の誕生」とか、ワシリェフの「中国古代における農業と共同体」とか、ペレロモワの「紀元前3世紀の中国における共同体の自治機関について」などをあげた。また史記会註考証補遺が欲しいけれども、なかなか手に入らないといって嘆いていた。

ペトロワ夫人はまもなくかけつけてきてくれた。私が自分の目的を話したところ、この研究所にも関係図書があるから利用せよといって、一般図書部に紹介してくれた。カードを繰るとスカチコフのビブリオグラフィヤにない本が相当ある。だいたいスカチコフはこの研究所の研究員である。会いたいと思ったが、ちょうど病気で会えなかった。ここでノートした本の冊数は50冊に近く、これはモスクワのレーニン名称図書館に次ぐ数字である。私はその中から15冊を選んでマイクロフィルムを頼んできた。15冊のうち半数の7冊がスカチコフに見当らないようである。中にはスカチコフのビブリオグラフィヤの出版後のものがあるのは当然として、それに前のものが含まれているのを見ると、首をかしげたくなる。逆にいうと、この研究所の一般図書部の分類目録が、よく整備されているともいえるかもしれない。それが当然スカチコフのビブリオグラフィヤ・キタイヤの基礎となったろうと考えおよぶのであるが、カタログとビブリオグラフィヤの間にこれだけ食いちがいのあるのは、いかにも不思議である。

この一階にはアルヒーフ部がある。私に関係の深い部分のカードをみせてもらったが、必ずしも資料は豊富といえないけれども、刊行物にはみられない珍しいものがあつた。たとえば次の通りである。

◎ダウリヤ、アルバジンおよび中国に関するフェドール、ヨアン、ピョートル・アレクセイヴィチ治世の文書の写し

◎ロシアと中国間の関係に関する 1757, 1758, 1763, 1764年の文書の写し

◎東部シベリア地方古文書資料（内容は中国における内乱とこの内乱に関連してロシアとの貿易が困難になったことについての、キャフタ市長から東部シベリア総督あての報告が、1853年2月9日付から7月29日付けでの17通以上を包含する）

◎1719年から1803年（？）に至るロシアと中国の関係の諸文書の写し

◎ア・ウラディキンが中国文および満州文から翻訳した古代および近代の中国皇帝の上諭

◎ルドニェフ・アンドレイ・デ

1716年の満州語・中国語・ラテン語文書

以上の文書はマイクロフィルムを依頼してきたが、複写には当局の許可が必要とのことであるから、果してうまく行くかどうか。それぞれ興味深いものだけに、ぜひ見たいと思っている。とくに東部シベリア地方古文書資料は、恐らくロシアからみた太平天国資料であろうと思われるので珍しいのではなかろうか。

そのほかマイクロフィルムを頼まなかったものに次の文書がある。

◎（サワ・ウラディスラヴィチ）私の北京滞在中と国境訪問中に秘密に聞くことができた“歴史的な研究と秘密情報……”を含む私の著作集

◎スイロミヤトニコフ・エス・エヌ、（オリエント・アルヒーフからの）中国語翻訳の基本

その他書きぬきたいものもあつたが、ついに時間切れでノートを中止してしまった。現物を見たいと申出たところが終業時間の30分くらい前だったため、勤務時間中に後始末が完了しないと困るからといって拒絶されてしまった。

2階には広いマニュスクリプトの部屋があり、そこも見せてもらった。そこに入れてもらうについては、次のような事情があつた。かねて私は北樺聞略の大黒屋光大夫などを含む、日露交渉の問題についても興味をもっていたので、ペトロワ夫人に、大黒屋光大夫がエカテリナ2世に拝謁した宮殿はどうなっているか、ということと18世紀前半にロジアに収容された、ソーザとゴンザという2人の日本人のマスクがレニングラードにあるというが見せてもらえないかということを探ねた。それがきっかけである。

後者については、さっそくペトロワ夫人が「そのマスクは行方不明になっている。そのマスクはバルトリドも書いているし、第一私がこの眼で見たのだから、それがあつたということは事実である。調べてみるとそれはエミターージュに移管されたという話だから、館長に搜索を頼んでみよう」といって、私を隣接するエルミターージュの博物館の館長室につれて行き、「この日本人がぜひ見たいというから、帰国までに探してもらいたい。一つのマスクは細面で、もう一つのは丸顔であつた。製作した彫刻家はコンラット・オスネルで、芸術的にも学術的にも価値が高いのだ」と説明した。館長もそれでは努力をしてみようといってくれたけれども、帰国直前に夫人に

1) 意味  
2) “  
じま  
を打  
動  
3) “  
こ  
の  
る。  
4) 打  
5) 「  
本  
6) 孫  
記  
7) ミ  
「ロ  
の  
は  
8) 且  
通  
目録

革命逸史  
上海  
著者は  
努め、且  
書は「通  
同日報  
等に発表  
というの  
代の調査  
体結成の  
での革命  
辛亥革命  
命史」



尋ねてみると、係が休暇でいないのでわからないということであった。私は「みつかったらぜひ写真を送って下さい」と頼んできた。

大黒屋光太夫が拝謁した宮殿はツァールスコエ・セロで、今はプーシュキンとっている。案内してあげようということで、翌日タクシーでレニングラード南郊の宮殿に行ってみた。なるほどひどい破壊である。復旧工事はまだ序の口で、ペトロワ夫人もその修復ぶりをみて、とても昔通りにすることはできまいと嘆いていた。北槎閣略に「さて後園には築山泉水天工を奪うばかりに造りなし」とある庭園は、その面影を比較的よく留めているが、広いので全部見物する時間がなかった。日本語の案内書には書いてないが、それは最近公開するようになったばかりになったからであろう。ロシア人の観光客がたくさんつめかけていた。

ペトロワ夫人は面白いものをみせてあげようといって研究所の2階にあるマニュスクリプト室へ案内してくれた。相当大的な室で、ガラスの陳列棚があり、写本類が陳列してある。アラビア文字、イラン文字のものがあり、奥には西夏文字のもあり、満州文字あり、ここが帝政時代のロシア探検隊の発掘物を収蔵している部屋だったのである。山本達郎教授が3度通ってようやく敦煌文書を見せてもらったといっておられたのはここかと思ひ当たった。カラホトから出た西夏の人物画が割合小さいものであることを知った。陳列品の中で鍵をあけて見せてもらったのは「俄羅斯繙訳捷要全書」という本である。手にとってみると14冊あり、1746年にイ・ロソーヒンとア・レオンティエフの著作になり、漢、満、露の辞書風のものである。縦書、横書を交え、ロシア語は変化を示している。もとより手書きであって、本の体裁も漢籍風であった。ペトロワ夫人はこの室の収蔵品を、レニングラード籠城900日の間守り通した苦心談を語ってくれた。籠城中この文書類は梱包して地下室に納め、ペトロワ夫人を含む5人の学者がこれを管理することになった。冬は窓が破れて雪が吹きこむので、春までにこれをかき出さねばならぬ。なれぬ重労働と栄養不足のために、ついに3人の学者が斃れ、ペトロワ夫人とボルドネロフ教授だけが残った。レニングラードでは、籠城900日の話を至るところで聞かされたが、ペトロワ夫人の話にはとくに感動をした。帝制時代から伝えられた、かけがえない文書類は、このように苦心をして守られてきたのである。

なおペトロワ夫人が西夏文字の文書のところで話してくれたのは、西夏文字研究の権威であったネフスキー教授のことである。同教授夫妻(夫人は日本婦人)はスターリンの粛清によって獄死し、その遺児はコンラッド教

授に養育されて成長し、現在レニングラードで女医として健在である。ネフスキー教授は先年フルシチョフによって名誉回復を宣言され、昨年はレーニン賞を授けられ、賞は遺児である、その女医さんが受領したとのことである。ネフスキー亡きあと西夏文字の研究者が絶えていたが、最近新進の学者が育っているという。

話がそれてしまったが、ペトロワ夫人が私をマニュスクリプト室に案内してくれたのは、大黒屋光太夫のためであった。光太夫がエカテリナ2世に献上した和書もここに保存されていた。先ごろ刊行された、亀井高孝氏の「大黒屋光太夫」によると、小野忠重氏の発表として「奥州安達原」などの浄瑠璃本が6冊、この研究所にあるとしているが、私がみたのは10冊であった。その和書の中には光太夫の手になる書きこみが、邦文およびロシア文字を交えてたくさんあり、ロシア文字のものは日本語で、エカテリナ2世側近の大臣ベズボロツコに対する怨みごとを綿々と書き綴っている。今でこそその意味がわかるが、当時のロシア人にも、また日本人にもそれはわからなかったわけである。そのほか達筆で認めている日本文字があり、その解説を求められたけれども、不馴れであるため、許しを得て写真におさめた。帰国後専門家に読んでもらっているの、その結果をペトロワ夫人に通知するつもりである。これは恐らく亀井高孝氏の同著の欠を補う資料を提供することになろう。というのは、光太夫の家族関係は不明の点が多いが、この写真には身内かと思われる人の名が多数書き連ねてあるからである。これについては、ペトロワ夫人によって研究が進められ発表されるであろう。

以上で私の図書館訪問の話は終るが、さらに2、3付け加えておこう。第一にエルミタージュの博物館についてである。日本に來たロシア秘宝展のスキタイの金製品は、ここの特別室 Особая кладовая に陳列してあり管理室に申込んで特別入場料を払わなければならぬ。案内人1人につき5ルーブル(2,000円)という入場料であるから団体を組まないと非常に高くつく。私は米国婦人たちとともに入ったが、ところどころに「日本の展覧会に出陳中」と書いて、陣列品が抜けている。しかし、それは全体の陳列品からすれば九牛の一毛であり、しかも対になるものが大抵残っていた。もってスキタイの遺品がどれだけ多いかを知ることができよう。

図書の購入について一言しよう。私は2、3年前に刊行された本を幾冊か買いたいと思って、モスクワとレニングラードの書店で尋ねてみた。ところがついに一冊も求めることができなかった。とにかく本の入手がむずかしい国である。むしろ日本のナウカ社の方が本があるというのが事実である。この国では出版されたとはいえ



ず買っておくという必要があるのである。古書については、モスクワにもレニングラードにも専門店がある。しかしその数はすくないようだから、古本を探すというのは、またむずかしいことである。私の印象では、レニングラードの古書専門店が比較的よく本をもっているようであり、歴史関係図書などよく揃えている店があった。モスクワでみつからなかった、私の探している辞書なども、レニングラードで手に入れることができた。これは私だけの印象であろうか。ほかの人の意見も聞きたいところである。

レニングラードで私は、とくにロシア革命の史蹟を見たいと思って心がけたが、意外なことに案内人なども見当ちがいなことをいうのである。1905年の血の日曜日事件の現場はどこかという、ストライキ広場であろうと言ったり、プチロフ工場はどこかという、即答できなかったりという次第である。10月革命博物館が見たいと言ったところ、タクシーの運転手が知っていてそこへ連れて行ってくれたけれども、案内人ははじめてらしかった。この博物館をみてようやく史蹟の地理的概念を現地に即して得ることができた。スモールヌイを見たいと思ったら、日時を指定され、当日行ってみると見物人は20人ばかりの、地方から来た少数民族の人々と私だけであった。モスクワの案内人も、くわしい説明をしてくれるのは、クレムリンとか寺院とか博物館などであって、現代史についてはあまり語らない。これは外国人観光客がロシア革命関係の史蹟などにあまり興味を示さないため

であろうか。何はともあれ、現代のソビエト人の中に、革命史を本で読むだけで、あまり知らない人が相当いるらしいことを私は知った。

私がかえってから一ヶ月あまりでフルシチョフが失脚した。私の滞在中、そんなことを予測できるはずはもちろんない。私が接触した日本人にしてもソビエト人にしても、誰一人としてフルシチョフ路線の修正などができようとは考えていなかった。ラジオを聞くと、ちょうど旅行中であったフルシチョフが、地方のソビエト人と陽気に談笑しているありさまが放送される。新聞にも盛んにフルシチョフのことが報道される。もうスターリン時代には絶対かえれませんよとソ連通はいう。私はただモスクワのレーニン博物館を一巡して、最後に大きなフルシチョフの肖像が飾ってあるのを見て、首をかしげた。やっぱりこれは個人崇拜ではないかと思った。神のように崇拜されたスターリンがこっぴどく批判された。フルシチョフもいつかは政権の座を去ることがあろう。そのときフルシチョフはどういう扱いを受けるであろうか。またフルシチョフも間違っていたとなったら、国民は指導者なるものをいったいどう考えるようになるだろうか。そんなことを思いめぐらした。フルシチョフの失脚が思いがけなくはやく来た。私はよい時に訪ソしたことになるかもしれないし、あるいはそうでないかもしれない。そのことは次第に明らかになるであろうが、私は今まで以上に自由な研究ができるソビエトになるように切に祈るものである。

(1964.12.6)



## 中国史学史学会に出席して

衛藤 藩 吉

## 1

昨年9月6日（日）から12日（土）まで Conference on Chinese Communist Historiography と題する研究会議がおこなわれた。場所はイギリスのオックスフォードから13マイルほどはなれた Ditchley とよばれる荘園のあとで、いかにもイングランドらしい、見わたすかぎりまきばと農園と森とがおりまざった風景のなかに、ポツンと一軒たっている、石造りの四階建てであった。スポンサーはロンドンにある The China Quarterly の編集部である。かりに中国史学史学会と訳したが研究会議の主題は、中国の史学史 (historiography) そのものではなくて、中華人民共和国成立以後の歴史研究、ことに中国史研究を対象とし、中国の歴史家がその歴史をいかに評価しているか (assessment) であった。

わたくしは、この会議に出席するため9月5日（土）おひるごろロンドンに到着、すぐに China Quarterly の事務所に行って、指定された Mt. Royal Hotel におちついた。翌朝勢ぞろいした参加者たちはバスにのせられて West End の一隅にある中華料理屋へ。そこでペチャペチャとおしゃべりしながら昼食をすませ、ふたたびバスで約2時間かかって Ditchley Manor に到着した。

朝は寝ているところに紅茶をもってくるサービスをやるのか、とたずねると、そりやそうさ、と答える。そういうイギリス流のサービスをいやがりそうなスタンフォードの劉子健氏やコロンビアの唐徳剛氏らに、あれをことわろうじゃないか、とさそうが、みな気乗りがしない返事である。わたくしだけことわる勇気がでず、とうとうあきらめたが、毎朝愛想のよい中年のメイドから、サービスされる紅茶は苦痛であった。もう一つの苦痛は正餐である。ここに滞在中正餐は夕食であった。Chief Administrative Officer といういかめしい肩書の退役海軍大佐 Grant 氏のとりしきる正餐は、なかなか豪華であるとともに、かたくるしいものであった。いやに礼儀正しい驚鼻の Grant 氏を紹介されて、Grant という名は1830年代のアヘン船の船長の名にあったっけなあ、などと心の中で考えながら挨拶をした。正餐の苦痛はまるで Grant 大佐の責任であるかのごとく、最初の二・三日は心ひそかにこの海軍大佐氏をうらんだものである。何

しろ、第一日の正餐にはホステスとしてこの Ditchley Manor の Provost なる Hodson 夫人が出席、にこやかに多数の参会者に心得た愛嬌をふりまく。わたくしのよう田舎者はコソコソと人のうしろにかくれ、とうとう挨拶をせずにすませホッとしたものである。ところで正餐は毎回 Grant 氏の指揮によって座席が変わる。そのたびにあたらしい隣り人と親しくならねばならないし、少くとも何か話をしなければならぬ。わたくしはこれでも日本語なら愛嬌のわるい方ではないが、とつづくのことはを口から出すとハタと胃液の分泌がとまってしまふ。エイ、ママヨ、と腰をすえて豪華な食べ物をたのしんでいると、突然隣りの人や向いあった人から話かけられてヘドモドと赤面する。前後6回にわたった正餐はわたくしにとってまことに苦痛であった。（会議の3日目あたり、Grant 大佐は、庭先の芝生で、croquet なる遊戯を伝授してくれた。にわかに恨がとけて親しみが湧いた。最後の日には別れるのが惜しいほどで、心からお礼をのべることができた。つまらぬことで人を恨むものではない、とはじたものである。）

会するもの三十余人。主催者側からは、まず編輯長の Roderick MacFarquhar。この人のお父さんが英領インドに永く在勤した、ときいて何となくモームの小説の中にでてくる、鋼鉄のような意志をもってその青春の血をひたすら植民地経営にそそぎ、齢初老にたってはじめて少年のように稚拙な恋をする一人の empire builder を思い出した。頬から顎にかけて真黒の鬚をいっぱいにはやし、ずんぐりとふとっていたので何かのとき、“Sir John Falstaff” とよんだら爆笑してこたえた。ユーモアを解するひとである。鳴放に関する著書あり、また中ソ論争についての論文などがある。

編輯部員 Gordon Barrass 氏は三十未満の好青年、いつもほほえみを失わぬおだやかなインド少女 Diniz 嬢とともに、終始黙々として、わたくしたちの世話をしてくれた。もう一人元気な世話役のおばさんがいたが、名は忘れた。記録係は Harold Kahn 氏、Harvard 大学の大学院学生時代白蓮教をやるとの計画で台湾から日本に留学、日本逗留中愛知大学の鈴木中正氏の「清朝中期史研究」をしきりにほめていた。現在 London 大学の School of Oriental and African Studies で中国史を講じてい



る。

つぎに、会議参加者の片影を記す。そもそもこの研究会議の原案では西側だけではなく、東側からも学者を招くはずであったが、結局イギリスまで出てくる適任者が得られず、西側だけのあつまりとなってしまったという。出席者のうち非英語国から参加したのはオランダ、ライデン大学の Hulsewé 教授とわたくしの二人だけであった。

Howard L. Boorman. 第二次大戦直後から中国に在勤した元アメリカ外交官。中国語が達者である。1955年に国務省をやめて、「Men and Politics of Modern China」という Columbia 大学に附属している大きなプロジェクトの主任となった。Arthur Hummel の“Eminent Chinese of Ch'ing Dynasty”と同様な列伝を、辛亥革命以後の中国について編纂しようというのがそのプロジェクトの目的である。愛児 Scott 少年に幼ない時から中国語を教えたり暮をやらせたりしていた。Ditchley にも連れてきており、15才の Scott 少年が全部の会議に出席、熱心に討論に耳をかたむけていた。

Jerome Ch'en. 燕京大学で経済学を講義していて、1947年に義和団賠償奨学金でイギリスに留学。そのまま居ついて London 大学の School of Oriental and African Studies で Ph.D. をとった。現在イギリスの Leeds 大学でアジア史を講じている。最近なかなかきめのこまかい毛沢東伝を公刊、筑摩書房で翻訳を計画している。黒い髪はやや長く、たえずひたいの上に落ちかかるのをかきあげかきあげ物しずかにしかし声に力をこめて語る姿は、抗日運動はなやかなりしころの典型的な中国の大学生である。

Kenneth Ch'en. ハワイ生れの仏教学者で現在 Princeton 大学教授。その著になる *Buddhism in China, a Historical Survey* はもうすぐ公刊されるはずである。丁度 Fulbright の奨学金をうけて一年間京都で研究することになっているということで、日本行きを大変たのみにしていた。快活な人である。

Chêng Tê-k'un. かねて名をきく中国考古学の大学者であるが、はじめて紹介されたときききちがえかとおもったほどに若く見えた。燕京大学から Harvard 大出身。戦時中は成都博物館の研究主任でその考古学作業はほとんど全中国におよんでいるが、なかんずく四川での発掘報告が有名である。現在 Cambridge 大学講師、史前中国、殷商中国、周代中国についてそれぞれ近著がある。日本の考古学者の業績に大変敬意をはらっていた。

David M. Farquhar. Maryland 大学で歴史を講じていたがこの会議の直前に Los Angeles の California 大学にむかえられた。ワシントン市にあるモンゴル関係の

文献を渉猟したモンゴル学者で、清代蒙古史専攻。大がらでアメリカ人にめずらしくはにかみやで無口である。会議場では座席がきまっていた、かれは一週間ずっとわたくしの左隣の席にいた。わからないことばがでくるたびにかれにたずねたが、いつも親切に教えてくれた。たまたまもっていた外務省中国課が執務参考用にガリ版刷りで出している「モンゴル年報」を見せたら、二三日貸せとって室にもってかえった。帰りがけにかえしてくれたとき、日本の外務省はこんなすばらしいものを編纂できる能力をもっているのかと口を極めてほめていた

Albert Feuerwerker. Harvard 大学で Ph.D. 論文に盛宣懷をとりあげ、それはのち *China's Early Industrialization: Sheng Hsuan-huai and Mandarin Enterprise* という題で公刊された。現在 Ann Arbor の Michigan 州立大学教授。最近、中国における近代史研究を紹介する *Chinese Communist Studies of Modern Chinese History* と題する解説付きの文献目録を出したり、“China's History in Marxian Dress”という論文を、*American Historical Review* の1961年1月号に書いたりしている。そのため、今回の会議では、議長にたてまつられた。奥さんは明朗であたりのやわらかな中国人である。

C. P. FitzGerald. Canberra の Australian National University でアジア史を講じている教授。専攻は唐代史、唐の太宗、呉后などについての著書がある。会議期間中、みづからすすんで発言することはまったくなく、しずかに討論をきいていた。これから Vancouver の British Columbia 大学に客員教授としておもむくといっていた。

James P. Harrison. Columbia 大学で目下 Ph.D. 論文執筆中の青年。中国近代思想史が専攻で、積極的に討論に参加してよく発言していた。

James R. Hightower. Harvard 大学の中国文学教授。漢詩が専門で、いかにも陶淵明や李商隠が好きそうな飄々としたところのある紳士である。これもまた FitzGerald とならんで会議ではほとんど発言せず、しずかに若い連中の討論をきいていた。二・三度芝生を散歩しながら話したが、ふるい中国の文明にたいするノスタルジーを示してはばかりず、その超然とした風懷はまことにうらやましかった。

C. T. Hu. Columbia 大学の Teachers' College で教育学を教えている教授。専攻は中国教育史であるが、*China: Its People, Its Society, Its Culture*, New Haven, HRAF Press, 1960. という大きな本を公刊したことがある。一見無愛想でとりつきにくい、つきあっているうちに急速に親しくなった。親しくなるとよく





冗談をいって人を笑わす好人物である。

G. F. Hudson. 有名な戦前派で、その若年の著書 *The Far Asia in World Politics*, London, Oxford University Press, 1939, は名著のきこえたかく、ことに尾崎秀実の邦訳、「世界政治と東亜」生活社、昭和15年、が出て戦前日本の中国研究者が好んで読んだものである。現在 Oxford 大学の St. Antony's College のフェロウで英国東アジア研究の大御所である。Lattimore と対蹠的に温厚な好々爺に見えた。

A. F. P. Hulsewé. 前にふれたとおり、オランダ、ライデン大学の中国史教授で、漢代史専攻。戦前蘭領東インドに駐在、中国語と英語は自由自在。一般にオランダ人は外国語が達者である。オランダ語そのものがゲルマン語とアングロ・サクソン語の中間にあるうえに、独立以来強国の間にはさまれた小国として、また商業国として、異国人との接触がきわめて多かった。今日でもオランダにおける外国語教育は徹底している。6年の初等教育のつぎに4種類の中等教育がある。今日のオランダでは大部分が中等教育までうけるという。① Gymnasium. これはいうまでもなくギリシア・ラテン語を中軸とする一般教養的中等教育で、現代外国語として英独仏三カ国語が必須である。② HBS. 古典語の代りに割に実務的な教育をおこなうが、それでも英独仏は必須である。今日はこのコースをえらんだ学生の大部分が大学へ進学する由。③ Lyceum. Gymnasium と HBS. の中間にあるもので、子供がまだどのようなコースに向いているかわからないときはこのコースをとり、後に理科系とか文科系とか選択することができる。ここでも西洋古典語の上に英独仏が必須である。④ ULD. このコースはまったく実務的なもので大学には原則として進学しない。しかしここでさえ、英語は必須である。このように小さいときからドンドン外国語教育をうけているので（しかも読むより話すのが中心に教育されているようだ）、オランダ入学者の語学力は大変なものである。E. Zürcher 氏の *The Buddhist Conquest of China*, Leiden, 1959. も英語だし、F. Vos 教授の *A Study of the Ise-monogatari* も英語である。このような大著を若い学者が英語で出しているが、英語国民に対して劣等感をいだいているかという点、決してそうではない。Hulsewé 氏のごときその実力と人格とで英米両国の学者からたかい尊敬をうけているように見うけられた。ここに参加した学者の多くは、かつて日本に逗留したり勉強したりした経験のある人たちである。しかし日本の中国史研究の業績に通じている点で、Hulsewé 氏に劣らないのは、楊聯陞、劉子健など中国系学者を除くとごくわずかにすぎなかった。語学そのものが上達しても頭がからっぽでは仕方が

ない。しかし、語学は学問研究の重要な手段であることは、Hulsewé 氏などつきあっていると痛感する。

John S. Koe. Seattle の Washington 州立大学大学院学生。Koe は古という姓であるといっていた。かねてこの大学の Far Eastern and Russian Institute では太平天国の総合研究をやっているが、そのせいであろうかこの Koe 氏も太平天国について Ph.D. 論文を準備している。

Owen Lattimore. 中国で育ち、新婚旅行に蒙古新疆におもむいたという著名な内陸アジア専門家。かつて Johns Hopkins 大学教授であったときマッカーシズムの犠牲となったが、法廷闘争をやりとおして、ついに勝った。現在は英国の Leeds 大学教授。モンゴル人よりもモンゴルびいきだという印象で、外モンゴルの西欧に対する関心を刺戟するため、学生6名を Leeds 大学に招くことを計画している、と語っていた。かねて多くの人から、日本人ざらいだときいていたが、なるほどとりつきにくい老学者である。会議の席上の議論でも一歩も譲らない一徹なところが見えたが、何回も話しているうちにだんだん打とけて、よく冗談などもいうようになった。奥さんは亭主の頑固さをおぎなうかのように終始にこにこと誰とでも気やすくつきあっていた。

James T. C. Liu (劉子健). Stanford 大学で歴史を講じている。青年時代を日本占領下の北京で過ごし、憲兵隊に逮捕されたこともある。今なお、抗日戦を憶い出すと昂奮して夜眠れない、日中関係をやりたいのだけれど、自分の神経がそれに堪え得ないだろうから、宋代を専攻する、とかつて1962年に Stanford に立寄ったさいしみじみと語ってくれたことがある。そのとき、ふと天地不仁と洩らしたら、翌日小さな色紙に書いてくれた。「老子曰天地不仁以万物為芻狗異国相逢往事増悲偶到本語嘆謂同感禿筆誌之以当夜談距長城之役又三十年矣」

Maurice Meisner. Virginia 大学の教職についたばかりの新進学徒。Chicago 大学の学生のときわたくしとはじめて知り合い、その真面目さに将来を大いに期待した。李大釗を学位論文にとりあげ、台湾留学の帰途東京に立寄った。そのとき、その将来性をもって特に、新島淳良氏や竹内好氏を紹介して教を請わしめたことがある。決して大きな声を出さないが、学問に対する情熱は青い焰をたてているような感じである。

Donald Munro. Ann Arbor の Michigan 州立大学で哲学を講じている。中国古代思想史の専門家、目下古代中国における内外の別の認識について研究している。タイプとしては Meisner に似た青年学徒であるが、やや声が大きくて快活である。

James B. Parsons. California 大学で東アジア史を担当している。専攻は明代民変史。長身で温厚、これもま



た無口の少壮教授であったが、ある日林の中を散歩しながら、西欧文明のゆくえについて意外にも深い懸念を示し、人類の運命に対していただいている危惧を洩らした。

Conrad M. Schirokauer, New York 市立大学で歴史を講ずる新進学徒。専攻は程朱の儒学で目下南宋葉適を研究中。

Stuart R. Schram, Minnesota 生れのれっきとしたアメリカ人であるが、現在は Paris の Fondation Nationale des Sciences Politiques の Centre d'Études des Relations Internationales に籍がある。特有のなまりのある英語で松岡洋右を思わせるほど雄弁である。日本に来たこともあるから、かれの雄弁（相手がわかろうとわかるまいと）ぶりに圧倒されたむきも少くないであろう。豊かな研究費で世界中をまわって資料をあつめ、毛沢東の文献研究では第一人者である。

T.K. Tong (唐徳剛)。Columbia 大学の East Asian Library の curator であるとともに中国史の講義を担当している。中国人は普通中国史関係で Ph.D. をとるが、唐氏は敢然とヨーロッパ史にとりくんで博士になったときいている。その飄々とした風貌と特色ある英語は East Asian Library に立寄った多くの日本人訪問者の印象に残っているであろう。奥さんは、日本軍占領下の上海地下国民党部の指導者呉開先のお嬢さんである。

Gungwu Wang, Kuala Lumpur の Malaya 大学で歴史を講じている。清朝史専攻、この人も日本人の研究業績を評価して得る数少ない人たちの一人であった。日本における中国史時代区分論争などについて一家の見をもっていた。

Holmes H. Welch, 現在 Harvard の East Asian Research Center の研究員で、中国宗教史専攻。かれは宗教と政治との関係について、西欧的な見解——つまり政治は宗教に対して優位にたってはならぬ、政治と宗教との間には一定の緊張関係があり、それぞれ独自の世界であるべきだという考え方——を堅持して、その立脚点から中国宗教史を分析しようとしている。いかにもアメリカ人らしい快活であけっぴろげな研究者である。

Hellmut Wilhelm, Seattle の Washington 大学の中国史中国文学の教授。ドイツ系ではあるが、その学問の深さと涼風のような淡白な人がらとで、アメリカの中国研究者の間で敬愛されている。煙草と酒が大好きなのでも有名である。かれのユーモアにわたくしたちはしばしば爆笑したものである。

Mary C. Wright, 何べんも日本に来たことのあるエネルギー的な女性。現在 Yale 大学で歴史を講じている。その同治中興に関する Ph.D. 論文は *The Last Stand of Chinese Conservatism: the Tung-chih*

*Restoration, 1862—1874* と題して公刊された。現在は辛亥革命を研究している由。

L.S. Yang (楊聯陞)。Harvard の中国史教授。専攻は社会経済史ということであるが、正に碩学の名にあたいする大学者で、わずかに京大の宮崎市定氏がこれに匹敵するぐらいであろうか。ただ宮崎氏は、その若年の著書「菩薩満記」にうかがえるロマンティズムを、後年深く蔵して洩らさず、実証史家としての節欲に徹した。楊氏は今なお奔放にアイデアを出すことにためらわない。しきりに戦時下北京での、竹内好氏らとのまじわりをなつかしがっていた。最後のおわかれパーティのとき、楊氏は京劇を唱って満座を湧かせた。

## 2

この研究会議では、研究報告はあらかじめガリ版刷りにして参加者にくばってある。したがって会議では報告書は読まれず、いきなりディスカッサントの論評（約10分から20分位）からはじまり、ついで研究報告を書いた人にやはり短時間の発言をさせて、あとに自由な討論がおこなわれた。

以下各セッションについて簡単に記そう。

9月7日午前の研究会の座長は Feuerwerker 氏。Chêng Tê-k'un の "Archeological Work and Writing on Archeological Topics under the Communists" と、Hulsewé の "Chinese Communist Treatment of the Origins and Foundations of the Imperial System" の二つの報告について、討論がおこなわれた。デスカッサントは両報告について、ともに楊氏。Wright や Boorman から党の政策と歴史研究との関係についてや政治的偏向が考古学にあたえる影響の有無について質問があった。Chêng は革命以後の中国考古学の発展を非常にたく評価し、政治の考古学への干渉が大きくはないと主張していた。FitzGerald も北京政府や中共の考古学的遺物に対する深い考慮を説明した。これに対して Hulsewé はやや批判的であった。近年建設第一主義の結果考古学的配慮がたりず、ために遺跡や遺物が破壊されたという話も出てきたが、それはたいしたことはないということに落ちついた。C14がまだ利用されていないという点について、Chêng は歴史記録のふるくから残っている中国古代史では、C14が急に必要なのではない、と説明していた。Hulsewé が中国の古代史研究家はマルクスの文献など十分に読んではいない、といったことから、マルクス主義文献の1920年代以降の中国知識人に対する影響の問題となり、議論はわいた。影響が大きかったとする人、影響が少なかったとする人いろいろであったが、わたくしはマルクスの著書そのものを読んだ中国人は少なかつ





たかも知れないが、マルクス主義的思考方はひろく影響をあたえた、と思うと発言した。

9月7日午後の研究会、座長は Hightower。Munro の“Chinese Communist Treatment of the Thinkers of the Hundred School Period.”と Wilhelm の“Chinese Communist Assessment of Neo-Confucianism.”について討論。前者のディスカッサントは Hightower みずからやり、後者については Schirokauer がやった。おおむね、諸子百家を評価する場合、今日の中国学者は三つの基準からする。すなわち、階級闘争をどの程度認識していたか、唯物論か観念論か、そして歴史の進歩にどのような役割をはたしたか、である、という点で意見は一致した。また南宋儒家に対する中国学者の評価について、Wilhelm がかなりたかく報告したのに対しては Schirokauer は否定的であった。

9月8日午前の研究会。座長は楊氏。報告は Ch'en 氏の“Chinese Communist Assessment of the Contributions of Buddhism in Chinese Culture”と FitzGerald 氏の“T'ang Dynasty in Communist Historiography”。前者のディスカッサントは Welch 氏、後者は Wang 氏であった。仏教の歴史的役割について中共は次第に再評価しつつある。これは、仏教が近代中国史ではたした役割が、ツアリズム・ロシアでのギリシア正教やモンゴルでのラマ教などとまったくちがうからだ、と強調したのは Lattimore であった。FitzGerald 氏のペーパーから、はからずも時代区分やアジア的生産様式をめぐる議論となった。わたくしは日本の学界での論争をごく簡単に紹介したが、それについて反応を示したのは楊、劉、Wang, Hulsewé など少数の人にしかすぎなかった。

9月8日午後の研究会。座長は Wang 氏。Koe 氏の“Chinese Communist Interpretation of the Taiping's Foreign Relations and Revolutionary Character”に対するディスカッサントは Harrison 氏。Harrison 氏の“Chinese Communist Assessment of Peasant Rebellions”のディスカッサントは Parsons 氏であった。一般的に会場の空気は、中国の歴史家が強く太平天国や農民暴動に近代性格や革命性をあたえすぎる、ということであった。旧中国の農民暴動の性格についての議論が、このセッションでさかんに取りかわされた。議論の中に太平天国と黄巢も同一にあつかおうという気配が見えた。わたくしは、農民暴動は現象的には相似性をもっている、その原因や性格は歴史の発展段階により、環境によりまた権力の側の動き方によってちがうのではないかとはいったかったが、英語が面倒なのでいかなかった。

9月9日午前の座長は劉氏。Farquhar の“Chinese Communist Assessment of the Barbarian and Conquest

Dynasties”とわたくしの“Chinese Communist Assessment of the Foreign Relations of China in the Nineteenth Century”がとりあげられ、前者のディスカッサントは Lattimore、後者のは Farquhar であった。Lattimore は Farquhar の研究報告にふれることすくなく、しきりにモンゴル、中国、ソ連、チベットなどの学者が相きそって研究する必要をとき、異民族の中国統治についても外モンゴル、内モンゴル、チベットなどの資料をもつかって研究しなおすべきであると主張した。わたくしは、ペーパーの中で「帝国主義」なることばの用法が中国人の間ではときどきアヘン戦争の時期までさかのぼって使われることにふれ、それは毛沢東が「中国革命と中国共産党」の中でそのような使い方をしているからである。しかし大部分の学者はレーニンの規定どおり日清戦争以後についてののみ「帝国主義」という概念を適用している、と書いた。Wright 女史は、それでもまだ使い方に混乱がある、と言っていたが、具体的例をあげての主張ではなかった。また膨脹政策と関連して、旧時代の中華思想的歴史解釈が、衣をかえてよみがえってきつつあるのではないか、という議論もあった。この説は、中ソ論争以来ソ連に強くあらわれ、ことにヴィヤトキン (P.B. Вяткин) とティフヴィンスキー (С.П. Тихвинский) 両氏の共同執筆になる「歴史の諸問題」(Вопросы Истории)誌、1963年第10号にのった“中華人民共和国における歴史科学の若干の問題(О Некоторых Вопросах Исторической Науки в КНР)”は、はげしく中国最近の史学界の傾向を「大国主義」として非難している(ついながら1964年11月に発行された「中国研究月報」にのった菊池英夫氏の“中国歴史学界における思想運動と史学理論”の一つのねらいはヴィヤトキンやティフヴィンスキーのような見方に対する批判であり、示唆にとむ)。しかし、反対論もあり、かならずしも参加者の多数がヴィヤトキンやティフヴィンスキーの考え方に賛成したわけではない(食事のさいや散歩しながらのおしゃべりをもふくめてわたくしのうけた印象は、白人学者はどちらかというと中国史学界の民族主義的傾向に対して批判的で、中国人系学者はそれが直線的に大国主義や中華思想とつながるものではない、という意見のようであった)。

9月9日午後から夜にかけて、Stratford-upon-Avon を訪問、Shakespeare の Richard II を観た。

9月10日午前の座長は Lattimore 氏。Feuerwerker 氏の“C.C.P. Treatment of Modern Chinese Economic History”をめぐって討論された。ディスカッサントは Wright 女史。かの女は清末は、はたして経済が荒廃したのか、という形で問題を提出、当然のことながら、主



として資本主義の萌芽問題に討論は集中した。わたくしもいっしょうけんめいに日本における中国経済史研究の業績を紹介しようとつとめた。楊氏は、全般的議論も大事だが、今後生き残っている銀行家にインタビューしたり、銀荘や糧棧などの個別研究が必要であることを大いに強調していた（最近村松祐次氏がなされた一連の江南租棧の研究のごとき楊氏は我が意を得たりとひざをたたくであろう）。

9月10日午後は Schram 氏が座長で、Hu 氏の“History Teaching in Communist China Today and Chinese Communist Historians”と唐氏の“Chinese Communist Treatment of Traditional Historiography”の二報告がとりあげられた。前者のディスカッサントは唐氏、後者のは劉氏であった。両報告とも、単純に中国歴史学界における政治の優越を非難したりせず、むしろ高度の歴史研究の場合はかなり政治からはなれて独自にできることや、将来学説が政治から自由になって、多様化していく可能性などについて淡々とのべてある。劉氏が、従来の中国旧史学だって evaluative character は強かったのだから、いきなり価値判断から自由になれといっても無理だし、価値判断の強いマルクス主義的史観は中国では容易に受け入れられたのが当然である、と説いていた。わたくしは、中国旧史学がもつ史料集成の伝統が今も生かされている面に積極的意義を認めたい、と発言した。

9月11日午前は Wright 女史が座長。Boorman 氏の“Mao as Historian”と Meisner 氏の“Chinese Communist Treatment of the Materialist Conception of History: Change and Continuity in the Marxist Tradition”とがとりあげられた。前者のディスカッサントは Schram 氏、後者のディスカッサントは Boorman 氏であった。毛の歴史観さらには毛沢東思想そのものが、その当初の問題意識は中国自強の方策を索めることにあり、したがって中国の土壤に生れてマルクス主義の肥料で育つものだ、という Boorman 氏の見解は多くの人の賛成を得た。Meisner 氏の報告に関連して9月7日の議論がふたたびもちだされた。つまり、中国人が、いかにしてマルクス主義を受容したその影響はどんなものであったか、という問題である。わたくしは日本における明治末期と大正時代の社会主義が中国人にあたえた影響を研究すべきであると提案した（李大釗、彭湃、廖仲愷などの例をひいて）。劉氏が、日本と中国の文化受容と思想の伝播関係についての討論をさそったが座長が気のりうすで話題をかえてしまった。

9月11日午後は一般討論と総括ということであった。

はじめに Kahn 氏が総まとめを読み上げ、Feuerwerker 氏の司会で討論がおこなわれたが、焦点がきまらず印象に残った発言はなかった。

### 3

この一週間朝から晩まで英語ばかり。さすがに疲れはてた。そしてこの一週間気持の上でははなはだ孤独であった。というのは、この会議での議論が、実はわたくしにとっては、歴史とは何かとか、歴史学とは何か、という根本的な設問に深く関わっているように思え、一週間たっぷりと改めて考えさせられたからである。参加者たちとの会話は、決してそのような根本的な設問にはふれなかった。あるいは心ひそかに、わたくし同様に、人間の営みのむなしさや、歴史学上の業績が何と乗り越えられるべきものにすぎないか、他人によって修正され蹂躪されるところにある歴史業績の本来の宿命、などに思をいたした人がいたのかも知れない。しかし表面はカクテルで朗らかに歓談する人びとでしかなかった。わたくしもまた、表面ニコニコとつとめたが、孤独感のはげしかった。しきりに中島敦がえがいた司馬遷がなつかしかった。

つぎに、自己の非力を歎いた。日本の中国史研究は質量ともに水準が非常にたかい。中国大陸の研究者のなかでも西欧圏の研究者のなかでも、案外日本の中国研究の発展は咀嚼されていない。そこで、K. Ch'en 氏が後日、衛藤は何についてもすぐさま日本ではこういう研究がある、といって講釈していたなあ、とひやかすほど、日本の業績の紹介につとめた。しかし、それでもなお足りない。ときには、あなた方の今しておられる議論は、日本の中国研究者のあいだではとくに片がついてますよ、といいたくなるような場面もあった。その点でも寂寥をいかんともし得なかった——劉子健氏が大いに同情してはくれたけれども——。

やがて後に来るものによって踏みくだかれねばならない歴史学——隅の首石であろうと捨石であろうと問わず——、しかも千年以上の錯綜した両民族の関係を背後にもつ日本において、中国史を研究すること、その中国では圧倒的政治の優位が不動の確信をもって叫ばれていること、しかもわたくしたちの歴史研究方法のみならず、近代社会諸科学すべてが西欧中心に発達してきたという動かし得ない事実、これらの諸元からどのような方程式を立てて、日本人の中国史研究をうちたてるべきか？ わたくしはこの問題の重さにおしつぶされそうになりながら、この研究会議をすごしたのであった。



## 近刊辛亥革命史料紹介

市古宙三

## は し が き

- 1) “近刊”とは、最近20年間に刊行された単行本を意味する。
- 2) “辛亥革命”とは、1911年の武昌における蜂起にはじまって、1912年の北京臨時政府の成立に終る革命を指すが、1894年の興中会の設立にはじまる革命運動も、この中に含まれる。
- 3) “史料”と“研究”との差をつけるのはむづかしい。ここで“史料”という中には、原題に“史料”と名のつくものは、史料らしくないものでも含まれている。
- 4) 排列は刊行年次による。
- 5) 「民報」,「雲南雜誌」,「辛壬春秋」のような複製本は含まれない。
- 6) 孫文,黄興,宋教仁など辛亥革命関係者個人の伝記,行状記,文集,全集の類は含まれない。
- 7) 辛亥革命の史料あるいは史料集だけであって,「中国近代工業史資料」「中国近代手工業史資料」のようなものは,辛亥革命研究に不可欠の史料集ではあるが,これには含まれない。
- 8) 単行本を原則とするが,「近代史資料」「安徽史学通訊」に載せられた狭い意味の辛亥革命関係史料の目録を末尾に附録する。

革命逸史(初集~五集) 馮自由

上海 商務印書館 1939~47 5冊

著者は広東省南海県の人。興中会時代から革命運動に努め、民国が成立すると臨時稽勲局長にあげられる。本書は「逸経文史半月刊」,「大風旬刊」,「華僑先鋒」,「大同日報」,「大漢日報」,「中央集刊」,「三民主義半月刊」等に発表された著者の小篇論文を集めたもの。その小論というのは、著者の興中会以来の革命体験と稽勲局長時代の調査とに基づいて、革命同志の略歴、逸話、革命団体結成の由来、その宗旨と結社員名、その他辛亥革命までの革命運動に関する逸話を記したもの。著者の書いた辛亥革命にいたるまでの革命運動史「中華民国開国前革命史」上,中編(1928年)と相補うべきもの。

湖北革命知之録 張難先

上海 商務印書館 1946 419p.

張難先は湖北沔陽の人。1904年科学補習所を設けてより革命運動に献身、1906年には萍醴の起義に関連して投獄されたが、4カ月で出獄後も革命に尽力した。湖北の革命を身を以て体験した人である。本書はこの著者が、自己の体験、革命同志の手記談話と朱子英「欧州同盟会紀実」,李雲生「査記欧州同盟会」,但植之「東京同盟会鄂籍会員名单」,李国鏞「起義日記」,居正「辛亥割記」,査光仏「武漢陽秋」,邱文彬「辛亥陽夏起義史略」,曹亜伯「武昌革命真史」,李長齡「日知会調査記録」等々の記録に基づき、1900年の庚子漢口の役から武昌首義、停戦、臨時政府の成立までの湖北の革命運動を詳述したものの。吾国革命思想之淵源(1頁),湖北革命之動因(18),庚子漢口之役(19),庚子甲辰間鄂人思想之演進(43),科学補習所始末(55),日知会始末(81),同盟会湖北分会之概況(103),丙午後公益社之扶助功用(142),湖北軍隊同盟会始末(145),群治学社始末(147),振武学社始末(152),文学社始末(158),共進会始末(179),同盟会中部総会与武昌首義(209),武昌首義之発動(234),都督府之組織施設及人選(266),漢口戦事始末(314),漢陽戦事始末(347),武昌防禦始末及停戦(380),中華民國政府成立(390),国会成立(404)の諸章からなっている。武漢における革命運動の経緯は本書によって最も明白になる。革命諸団体の興亡のほか、湖北革命同志の碑伝、行状、事略が記されていて、極めて便利。辛亥革命の研究に欠かすことのできない本である。初版は重慶にて1945年11月。

中国国民党史稿(増訂版) 鄒魯編著

上海 商務印書館 1947 4冊

1929年初版、1938年改訂版の「中国国民党史稿」の増訂版。前の2版とはかなり異り、内容がずっと豊富になっている。1894年の興中会の創立から、1925年中国国民党第一回中央執行委員会第三次全体会議までの党史で、組党(第一冊),宣伝(第二冊),革命(第三冊),列伝(第四冊)の4部に分れている。従って辛亥革命の専著ではないが、過半は辛亥革命前に当てられている。また史料とはいえないかも知れないが、著者は同盟会以来の



革命運動家で、本書でなければ知られないような事が少くない。第四冊の列伝には、孫文、鄭士良、陳少白以下227人の伝記があって便利。

**華僑革命開国史** 馮自由

上海 商務印書館 1947 122 P.  
(初版 重慶 1946)

華僑の間に設けられた清末の革命結社66を地域に分って排列し、それらについて、何時、何処で、誰が何のために作ったか、その活動状態はどうであったかを簡単に解説したもの。「中国革命運動二十六年組織史」の中に含まれる。

**革命史譚** 陸丹林

南京 独立出版社 1947 (2版) 300 P.

著者は馮自由の友で、馮自由とともに「逸経」「大風」に、辛亥革命にいたる革命の逸事を書いていた。本書はそれらを集めた短篇の逸話集。

**武昌開国実録** 胡祖舜

武昌 漢口交通路建国書局 1948 線装2冊

著者は湖北省嘉魚の人。共進会首脳の一で、革命後は湖北都督府の参議となる。本書は著者が自ら体験したところ、自ら所蔵する材料を主とし、民国の檔案、清の内閣官報、革命関係者の口述筆記、外国領事の報告文書などを参考にして、1904年科学補習所ができてから、1912年北京臨時政府が成立するまでの武昌における革命運動、革命の経過を記述する。全体は、科学補習所、日知会、東京共進会、湖北共進会、文学社、首義総動員計劃、武漢機關破壊三烈士就義、武昌各軍首義、佔領武昌戦況などの53項目に分けて叙述される。

**中国革命運動二十六年組織史** 馮自由

上海 商務印書館 1948 299 P.

著者ははじめこの本に「開国前国内外革命党各機関説明」と名付けたというが、このもとの名前の方が本書の内容をよくあらわしている。孫文が広州博濟医院に入って革命運動の第一步を印した1886年から辛亥革命の1912年まで、26年間に設けられた革命機関(報館、学校、書肆、印刷所、書報社、歌劇団、党会、軍隊、暗殺団、商店、旅館、医院、輪船、農牧場)千数百を設立年次に排列して、それらの機関が何時、誰によって、何処で、何のために作られたか、それは何をして、どうなったか、ということを簡明に記したもの。著者は興中会、中国同盟会の首脳であり、これら革命団体の機関誌「中国日報」の編修をやっていたので、この時期の事を自らの体験に

より熟知しているほか、材料も多く持っているので、本書は便利であるばかりでなく、資料的価値も高い。同じ著者の前著、「中華民国開国前革命史」、「革命逸史」、「華僑革命開国史」についてもこの事はいえる。

**辛亥革命北方実録** 胡鄂公

上海 中華書局 1948 182 P.

著者は湖北省江陵の人。早くから革命に志し、特に1909年保定に共和会を創ってからは積極的に華北一帯における革命運動を領導した。本書は北方における革命運動の経過を全国の革命運動との関連において詳述した「辛亥革命北方実録」と、同時に著した「辛亥革命北方烈士列伝」とを収める。両書はいずれも著者がその体験を基として、北京政府成立後間もない1912年3月に脱稿、4月に黎元洪に献呈したもの。黎元洪の勸告で、「袁世凱之盗国、汪兆銘之出売革命」をいうが故に、袁の弾圧を恐れて、当時は出版されなかった。

**文学社武昌首義紀実** 章裕昆

北京 三聯書店 1952 80 P.

1904年に科学補習所を設けてから、日知会、群治学社、振武学社を経て1911年の文学社設立にいたるまでの武昌における革命運動の系譜をまず明かにし、文学社が共進会と合作して武昌に革命をおこし、1912年同盟会に合併して解消するまでの経緯を明かにする。著者は湖南省寧郷の人。早くから武昌の革命運動に参加し、文学社首脳の一として活躍する。その彼が、自己の体験と同志の手記見聞、呉醒漢「乙巳俱樂部雙十特刊」、龔震初「武昌兩日記」、王守愚「十二年回憶録遺稿」、王讚承「四十二標革命史稿」、鄒永成「湖南光復記」、胡石庵「湖北革命実見記」、蔡寄鷗「四十年来聞見録」、張難先「劉静菴先生墓碑」、查光仏「武漢陽秋」、譚人鳳「牌詞」、周海珊「梁瀛洲先生革命紀」等々により編修したもの。これが編修されたのは1936年であるが、武昌の発難を同盟会の功績としようとする国民党は、それが同盟会とは別の文学社によって計画されたとする本書を好まず、従って人民中国の出現するまで本書の刊行はされなかった。

**革命文献** 羅家倫主編

台北 中央文物供应社 1953～

中国国民党中央委员会党史史料編纂委員会では、1953年以来、同会所蔵の資料を中心として、革命文献を時代、主題に応じて整理、刊行している。羅家倫主編の「革命文献」というのがそれで、現在、第33輯まででている。第一輯から第四輯までが、清末及び辛亥革命関係の文献で、その内容の大略は次の通りである。



## 第一輯 (1953年, 総1~140頁, 挿図6枚)

- 中華民国開国時期史料 (総1)  
武昌首義以降の革命派間の往復電文, 孫總統の布告等を集める。  
秋瑾烈士為国殉難文檔 (総98)  
承弁秋瑾烈士案之清吏往来文電及清廷上諭, 秋案党人供詞, 秋瑾烈士被捕時経搜獲之文字稿件を集める。

## 第二輯 (1953年, 総142~271頁, 挿図4枚)

- 中国同盟会史料  
田桐「同盟会成立記」, 馮自由「記中国同盟会」, 曼華「同盟会時代民報始末記」, 朱和和「欧洲同盟会紀実」や, 「同盟会成立初期之會員名冊」, 「中国同盟会総章」, 「中国同盟会務進行之秩序表」, 「中国同盟会星架坡分会章程」等を集める。

## 第三輯 (1953年, 総273~442頁, 挿図4枚)

- 興中会史料 (総273)  
ホノルルの自由新報特刊「檀山華僑」と馮自由の「革命逸史」の抄録  
胡漢民自伝 (総373)  
民国元年6月, 広東都督に返任するまでの自伝。

## 第四輯 (1953年, 総443~568頁, 挿図4枚)

- 辛亥革命史料  
武昌開国実録 胡祖舜 (総444)  
辛亥武漢首義実録 蔡濟民 吳醒漢 (総497)  
辛亥陽夏起義史略 邱文彬 (総504)  
湖南光復運動始末記 彭楚珩 (総508)  
辛亥江西光復記 蔣君羊講述 (総516)  
南京陸軍第九鎮起義始末 程家模 (総531)  
關於攻取南京天堡城情形之報告 張兆振 (総538)  
辛亥海軍挙義記 張懌伯 (総541)  
辛亥海軍挙義記略 何海鳴 (総548)  
辛亥革命海軍反正紀実 陳春生 (総560)

なお, ここに転載された「武昌開国実録」ははじめの部分だけである。

## 華僑革命組織史話 馮自由編著

台北 正中書局 1954 90P.

「華僑革命開国史」とほぼ同じ。前著が革命結社を地域によって分ったのに対し, これは興中会時期と同盟会時期に分けて排列し, 前期においては25, 後期においては32の結社について解説を施している。「中国革命運動二十六年組織史」の中に含まれる。

## 辛亥革命 中国史学会編

上海 神州国光社 1957 8冊

## (中国近代史資料叢刊)

辛亥革命に関する最も豊富な資料集。含まれる時代は, 1894年ハワイに興中会がつくられてから, 1912年孫文が臨時大總統を辞任して北京政府が成立するまで。全体を4部に分け, 各部をさらに項目に分け, 項目中心に資料を集めている。各冊に含まれている項目を記せば次の通りである。

## 第一部 興中会時期の革命活動

- 第一冊 興中会, 唐才常の漢口起義, 洪全福起義, 蘇報案, 華興会, 光復会, 日知会

## 第二部 同盟会時期の革命活動, 清廷の立憲預備

- 第二冊 同盟会, 民報, 萍瀏醴起義, 黄冈防城起義  
第三冊 徐錫麟及び秋瑾案, 鎮南関起義, 熊成基の安慶起義, 雲南河口起義, 新軍起義, 各地人民の反清闘争  
第四冊 清廷の立憲預備, 立憲派, 黄花崗の役, 保路運動

## 第三部 武昌起義及び各省起義の経過

- 第五冊 武昌起義 (湖北)  
第六冊 各省起義 (四川, 陝甘, 湖南, 山西, 雲南, 直隸, 江西, 貴州)  
第七冊 各省起義 (江蘇, 浙江, 福建, 安徽, 広西, 広東, 新疆, 山東, 蒙古, 西藏, 河南, 東三省, 海軍, 民国各団体の組織)

## 第四部 南京臨時政府及び中華民国成立の経過

- 第八冊 南京臨時政府, 南北議和, 帝国主義と辛亥革命, 南北議和後中華民国の成立。

なお第八冊には「徵引書目与参考書目」(611~674頁)があげられている。これによれば, 引用書は117種の多きに及び, 中には未刊の稿本類も含まれている。但し全文の収録されているのは, 「興中会革命史要」「孫逸仙」「浙案紀略」「天討」など数種にすぎず, またその他の文献も, 資料を項目(事件)に即して集めるというたてまえ故に, 寸断掲載されるという結果になっている。事件を一応の資料に基づいて知るのに最も便利。参考書としてあげられたものは133種, 引用書とともに, 簡単な解説がつけられている。

## 辛亥首義回憶録 中国人民政治協商会議湖北委員会

武漢 湖北人民出版社 1957 3冊

辛亥武昌の革命に参加した人たちの回想録——既刊のものとならに書き下されたものと——, 未刊の遺著を集める。各篇のはじめには編者の按語があり, 著者の履歴, 回憶録の来歴などを解説する。その内容は次の通り。  
第一輯 (1957年, 221頁, 写真7枚)

## 座談辛亥首義



江炳靈 章裕昆 李西屏  
 辛亥首義工程營發難概述  
 辛亥革命實踐記  
 辛亥回憶一則  
 辛亥武昌首義回憶  
 日知會  
 我參加革命經過  
 辛亥革命前後我的經歷  
 辛亥革命自伝之一章  
 八月十九夜所見及其他  
 辛亥革命運動中的共進會  
 辛亥革命醞釀時期的回憶  
 炮八標起義經過与漢口戰役  
 我所參加的辛亥革命工作  
 辛亥首義之第三十二標  
 武昌首義紀要  
 工程第八營發難紀実  
 黃州光復  
 辛亥革命陽夏戰爭述略  
 回憶辛亥首義和招討安襄鄖荊經過  
 辛亥史話

第二輯 (1957年, 226頁, 写真7枚)

我參加革命的經過  
 測繪學堂辛亥武昌首義紀実  
 辛亥革命二十九標首義紀実  
 第二十一混成協工程隊首義經過  
 第三十標辛亥首義事略  
 第三十二標辛亥首義真相  
 湖北新軍在資州反正的回憶  
 辛亥首義紀事本末

第三輯 (1958年, 167頁, 写真7枚)

獄中記  
 潘怡如自伝  
 記文学社  
 辛亥首義前後  
 辛亥武昌首義真象  
 辛亥陽夏光復史略  
 辛亥首義之片断回憶  
 回憶祁国鈞烈士  
 辛亥武昌起義前後記

辛亥四川爭路親歷記 周善培

重慶 重慶人民出版社 1957 65P.

宣統3年(1911年)4月, 清朝政府が商弁の四川鉄道を外国借款により国有とすることとした結果, 四川に暴動が起り, それがやがて武昌の革命を誘発する。周善培

李春萱 (1)  
 熊秉坤 (19)  
 温楚珩 (48)  
 呂中秋 (64)  
 陳孝芬 (68)  
 范鴻勛 (76)  
 劉化欧 (82)  
 郭寄生 (91)  
 梁維璽 (100)  
 童 愚 (103)  
 潘公復 (117)  
 万鴻階 (117)  
 張文鼎 (125)  
 李白貞 (150)  
 許兆熊 (158)  
 王保民 (165)  
 周占奎 (170)  
 李長庚 (174)  
 辜仁発 (179)  
 謝楚珩 (194)  
 胡 贊 (211)

梁鍾漢 (1)  
 集体回憶 (43)  
 諸義平 (56)  
 黃世傑 (82)  
 魯祖軫 (89)  
 王時傑 (95)  
 郭瑞庭 (101)  
 李春萱 (105)

殷子衡 (5)  
 潘康時 (35)  
 潘康時 (54)  
 范騰霄 (62)  
 黃元吉 (81)  
 邱文彬 (94)  
 方孝純 (100)  
 江炳靈 (113)  
 朱峙山 (119)

は当時四川の勸業道で, 鉄道問題当面の清朝側の責任者。その著者が1956年, 当時を回憶して自己の体験を記したのが本書。鉄道国有の上諭が四川に到達した宣統3年5月から同年10月四川の独立するまでの成都を中心とした四川の政治的推移を叙述する。革命当時の革命同志の回想録はたくさんあるが, これは清朝の鉄道問題責任官吏の回想録で, 珍しいもの。その叙述に批判は要するが。

辛亥革命先著記 楊玉如

北京 科学出版社 1958 285P.

著者は湖北省沔陽の人。共進会首脳の一で, 武昌革命を領導する。本書はその回憶録で, 武昌起義前の武昌における革命活動と起義の情形, 起義後の革命軍政府の成立と清軍との作戦情況, 各地の革命響応, 官軍の和議經過, 清帝の退位と北洋軍閥の革命さんだつの事情を記す。著者自身の体験のほか, 曹亜伯「武昌革命真史」, 張難先「湖北革命知之録」, 胡祖舜「武昌開国実録」, 李廉方「辛亥武昌首義紀実」などによる点が多いと思われるが, 出典も参考文献も記されていない。ただこれらの著述と自分の意見の異るときは注記されている。

辛亥革命史料 張国淦

上海 竜門聯合書局 1958 338P.

「辛亥革命史料」とはいうが, 史料でもなければ, 史料集でもない。胡祖舜「武昌開国実録」, 曹亜伯「武昌革命真史」, 章裕昆「文学社武昌首義紀実」, 張難先「湖北革命知之録」, 李廉方「辛亥武昌首義紀実」等を材料として, 革命の経緯を概説したもの。全体は武昌首義(1頁以下), 各省響応武昌(195), 南北議和(269), 清帝退位(309)の4篇にわかれ, 各篇は更に, 武昌首義以前革命之秘密機關, 武昌革命總動員計劃, 武昌所駐新軍などの項目に分けて要領よく説明されている。このような叙述の間に革命側, 清側の公文書(通電, 告示, 司令, 上諭, 名簿の類)が挿入されているが, 出典はほとんど明かにされていない。巻末(323~338頁)に辛亥革命大事表がある。

四川保路運動史料 戴執礼

北京 科学出版社 1959 548P.

1911年の四川保路運動に関する史料475件を集める。資料は率ね川漢鉄路公司, 四川保路同志会, 四川保路同志軍, 成都, 重慶軍政府, 四川都督府, 及び清廷, 郵伝部, 川漢粵漢鉄路大臣, 四川地方官吏等に属するもので, 布告, 奏稿, 伝單, 宣傳書報の類が180余件あり, その大部分は未発表の, 極めて貴重なものである。資料



は運動の発展段階に応じて5巻に分けられている。第一巻は運動発生前の史料、第二巻は清廷が商弁の鉄道を外国借款により国有にすることにしてから四川の立憲派との間に紛争対立が生ずるようになるまで、第三巻は四川保路同志会が成立してから四川人が正式に独立を要求するまで、第四巻は四川人が武装起義してより清朝の四川における反動統治が瓦解されるまで、第五巻は同盟会の革命党人が重慶にあって独立してから立憲派が勝利の成果をさん奪して革命が失敗に終るまでである。各巻のはじめには、その巻の内容の簡単な説明がある。また巻末に引用書報目録(541～548頁)あり、78種類の文献が掲げられている。四川保路運動の極めて貴重な資料。

雲南貴州辛亥革命資料

中国科学院歴史研究所第三所編

北京 科学出版社 1959 317P. 写真4p.

雲南、貴州両省における辛亥革命関係資料集。その資料には次の4種がある。(1)「雲南警告」,「雲南留日本同志檄国内反対清政府借外兵文」,「貴州血涙通知書」,「袁世凱之禍黔」のような原文書。(2)「辛亥貴州革命紀略」,「昆明辛亥革命回憶録」,「宦滇日記」など当事人の回憶録や当時人の日記。(3)「雲南光復紀要」,「統雲南通志長編」のような未発表の旧稿本。(4)「貴州革命先烈事略」,「永昌府文徵」などの流伝の比較的少ない版本。その内容は次の通り。

雲南辛亥革命資料

雲南警告	雲南留越学生 ( 3 )
雲南陸軍講武堂の概況	素庵 適生 ( 14 )
辛亥革命文献四種	
雲南留日本同志檄国内反対清政府借外兵文	( 20 )
勸告国人反抗偽立憲文	( 23 )
武昌起義同盟会檄国内響応文	( 30 )
告満洲留学生文	( 32 )
同盟会瑣録	呂志伊 ( 35 )
昆明辛亥革命回憶録	李鴻祥 ( 37 )
雲南光復軍政府成立記	孫 璞 ( 43 )
雲南光復紀要——建設篇	周鍾嶽 ( 47 )
張文光光復騰越記	仰光光華日報 ( 62 )
大理獄中供詞	祝宗瑩 ( 64 )
蔡鏐致李根源電稿	張文光 ( 73 )
竜陵辛亥起義紀事	李若曲 ( 75 )
迤西各属光復記	由雲竜 ( 77 )
宦滇日記(選録)	崇 謙 ( 82 )
雲南辛亥革命長編	統雲南通志長編 ( 97 )
雲南辛亥革命参加者列伝	(121)
貴州辛亥革命資料	

辛亥貴州革命紀略	黄濟舟 (147)
貴州辛亥革命散記	吳雪霽 胡 剛 (174)
貴州光復紀実	楊昌銘 (199)
貴州起義首功黄沢霖被害略述	黄烈誠 (210)
貴州血涙通告書	周培芸等 (212)
黔人乞救書	徐竜驤 (223)
為劉顕世等惨殺黔人上参議院書	張友棟等 (226)
布告同胞啓	魯 瀛 (231)
袁世凱之禍黔	劉世傑 (235)
先烈鍾山玉先生事略	鍾全林 (269)
貴州革命先烈事略	平 剛 (273)
貴州政局的回憶	韓祉章 (311)

辛亥革命前十年間時論選集 (2巻) 張枬・王忍之共編  
北京 三聯書店 1960～63 4冊

次に掲げる清末1901～1911年間の雑誌の中から、当時の資産階級、小資産階級の思潮をうかがうのに適当と思われる論説を選んで、年毎に編集したもの。第一巻には1901～1904年分、第二巻には1905～1907年分が収められている。第三巻は未見。

清議報	開智録	国民報	外交報
新民叢報	游学訳編	大陸	湖北学生界
直説	浙江潮	童子世界	中国白話報
江蘇	覺民	女子世界	東方雜誌
揚子江	国粹学報	醒獅	民報
復報	雲南雜誌	鵲声	中国女報
漢幟	中国新報	天義報	新世紀
政論	四川	二十世紀大舞台	

中国新世界新志

このほか、次の単行本も全文もしくは抜萃しておさめられている。

新広東	蘇報案記事	新湖南	煊書
革命軍	国民日日報彙編	黄帝魂	

辛亥革命 吳玉章

北京 人民出版社 1961 172p.

著者は四川省榮県の人。日本に留学して同盟会に参加。辛亥革命の時期には四川にあって、直接革命を指導する。本書は“論辛亥革命”(3～27頁)と“從甲午戦争前後到辛亥革命前後的回憶”(29～162頁)の2篇を収める。前者は革命に尽力した著者が今日よりふりかえって革命の性格を論じたもの。後者は、日清戦争の頃から辛亥革命にいたる革命運動——特に四川における——を自己の体験を基にして叙述する。巻末に1894～1912年の“大事記”(163～172頁)があり、また21枚の写真が挿入されている。



## 辛亥武昌首義紀 李廉方

台北 正中書局 1961影印 231 丁

中国国民党中央委員会党史史料編纂委員會で編修している「革命史料集刊」の一として影印されたもの。原序の日附は1947年8月。著者は湖北省京山の人。武昌の革命運動に早くから参加する。本書は、その体験、同志の手記談話、曹亜伯「武昌革命真史」、張難先「湖北革命知之録」、章裕昆「文学社武昌首義紀実」、馮自由「革命逸史」、邱文彬「陽夏起義史略」、胡石庵「革命実見記」、何海鳴「文学社革命史読後感」、「辛亥首義史蹟」等によって、編修したもの。革命団体（1丁以下）、起義前籌画（70）、秘密機関破露（80）、十九之夕（84）、擁黎元洪為都督及宣誓（102）、三鎮光復（108）、成立軍政府（116）、各国領事宣布中立及國際情態（127）、陽夏戦争及呉禄貞与黄興（134）、湖北軍隊所在地之光復（185）、各省光復（199）、停戦議和（205）の12章から成る。

## 辛亥革命江蘇地区史料 揚州師範学院歴史系編

南京 江蘇人民出版社 1961 590p. 図8p.  
(1963 大安影印)

揚州師範学院歴史系では辛亥革命50周年を記念して、中国近代現代史教研組副主任の祁竜威が主になって、江蘇における辛亥革命関係史料の蒐集をはじめた。文献、口頭の史料採訪は1958年からはじめられ、上海、蘇州、太倉、常州、鎮江、南京、揚州、淮安、南通、徐州の10県に互って、集められた資料は50余万言に及んだ。本書は、これらの資料、および「江蘇革命博物館月刊」、「近代史資料」、「辛亥革命文献展覧会紀念冊」等々解放後の雑誌に発表された資料の中から選択編修したもの。全体が2部分に分れる。第1部は綜合部分であって、江蘇全省にわたる資料として、程德全「撫吳文牘」（1頁以下）尚秉和「辛壬春秋」（54）、朱熙「雲陽程公六十寿序」（60）、張謇「耆翁自訂年譜」（64）、徐兆璋「棲秋館日記」（67）の中から江蘇における辛亥革命関係部分を摘録し、また「中華民國蘇軍都督府通令」（62）、「蘇軍都督告示」（63）、を載せ、「趙烈士（趙声）事略」（84）及び彼の作「歌保国」（94）を附録する。第2部は分区部分であって、蘇州府（97）、常州府（151）、無錫常熟江陰三県辺区農民起義（183）、太倉州（207）、通州（217）、鎮江府（239）、揚州府（293）、淮安府（331）、海州（369）、江寧府（379）、徐州府（573）の11区に分けて、各地区関係の資料を羅列する。珍しい史料が多い。

## 辛亥革命資料 中国科学院近代史研究所編

上海 中華書局 1961 625p.

「近代史資料」1961年第1号（総25号）にあたるもの

で、次の11篇の資料を含む。

南京臨時政府公報	(1)
広東独立記	大漢熱心人 (435)
辛亥広西援鄂回憶録	耿毅 (472)
樗公隨筆	謝石欽 (487)
李国鏞自述	李国鏞 (499)
左紹佐日記摘録	左紹佐 (509)
辛亥記事	王錫彤 (517)
孫大總統的近衛軍始末記	李葆璋 (523)
中国国民総会材料選輯	沈雲蓀 (531)
寧波国民尚武分会旬報片断	(543)
日本駐漢口総領事館情報	(549)

「南京臨時政府公報」は、1912年1月29日から4月5日まで発刊された「臨時政府公報」の選録。「広東独立記」は広州中山図書館所蔵の「興漢紀念広東独立全案」（別名「広東独立記全案新書」）の選録。末尾に辛亥年9～11月の「南越報」にみられる辛亥革命関係資料が転載されている。「辛亥広西援鄂回憶録」は「近代史資料」1958年第4期に掲げられた耿毅「辛亥革命時期的広西」の続編、「樗公隨筆」は共進会の秘書長で湖北都督黎元洪の顧問となった謝石欽の見聞録、武漢革命を知るのに貴重な資料である。「李国鏞自述」は「李国鏞革命事略」（別名「李国鏞起義日記」）の節録。李国鏞は立憲派で武昌に革命が起ると、旧官僚を集合して保安社を組織し、黎元洪、袁世凱と連絡をとった。本書には湖北軍政府と反革命派の往来の事情がよく記されている。「左紹佐日記摘録」は左紹佐日記稿本141冊の中から宣統3年8月24日～9月19日の日記を摘録したもの、両広総督張鳴岐を首とする官僚地主の広東における投機活動、独立の名の下に革命を弱体ならしめた経緯がうかがわれる。「辛亥記事」は袁世凱の信賴する部下の王錫彤の日記「抑齋自述」の中から辛亥年8月18日以降、同年末までの分を摘録したもの、辛亥革命時期の袁世凱の態度と行動を知るに便である。「孫大總統的近衛軍始末記」は近衛軍に関係した李葆璋の記憶により軍の創設からその後について記す。「中国国民総会材料選輯」は沈雲蓀の家に蔵されていた中国国民総会（1911年春、陳英士、傅夢豪によって上海に設立され、1922年冬国民党と合併）関係の文件を整理し、会の宗旨、組織、活動状況を明かにしたもの。「寧波国民尚武分会旬報片断」は「尚武会旬報」第4期（辛亥9月1日）と第7期（辛亥10月1日）を集めたもの、寧波独立の事情がわかる。最後の「日本駐漢口総領事館情報」は日本の駐漢口総領事松村貞雄の武漢革命に関する本国への報告「湖北反乱情報」の翻譯、部分的に刪去されている。

バ  
の翻  
る。  
驚く  
戦後  
文献  
ない  
献を  
た。  
2巻  
ら届  
国の  
それ  
易関  
て」  
とい  
クロ  
そ  
って  
留学  
週間  
ので  
たち  
一憂  
て入  
行者  
う。「  
また  
ら、  
日本  
化ア  
をも  
前後  
ノフ  
は科  
だいた  
はよ  
文庫  
主要因



## 辛亥革命回憶録（第一～第五集） 中国人民政治

協商會議全國委員會文史資料研究委員會編

北京 中華書局 1961～63 5冊

辛亥革命50周年を記念して革命同志の回憶録を集めたもの。その回憶録の中には、前に刊行されたものもあるが、本書によってはじめて公にされたものが多い。回憶録を史料として使うばあい、それが何時記録されたかということが問題となる。本書の回憶録は、本書刊行のために記録されたものが多い。第一集の内容は次の通りである。

第一集（1961年10月，636頁，写真22枚）

辛亥革命回憶	朱 德（1）
我的回憶	何香凝（12）
我親身經歷的辛亥革命事實	黃炎培（60）
辛亥革命前後回憶片斷	程 潜（70）
辛亥起義前後到二次革命	吳玉章（94）
廣州起義親歷記	熊克武（130）
辛亥革命雜憶	沈鈞儒（138）
回憶辛亥革命	張奚若（143）
我在辛亥這一年	馬叙倫（170）
辛亥前後黃克強先生的革命活動	李書城（180）
疏「黃帝魂」	章士釗（217）
文學社與武昌起義紀略	李六如（305）
黃花崗起義與炸斃鳳山親歷記	陳其尤（315）
辛亥前後十年雜憶	李根源（322）
關於黃興・華興會和辛亥革命後的 孫黃關係	周震麟（330）
戲劇界參加辛亥革命的幾件事	梅蘭芳遺稿（342）
辛亥革命前後保定革命運動回憶錄	劉仙洲（374）
辛亥前後彭沢民先生和吉隆坡華僑 的革命活動	陳其瑗（392）
辛亥革命時期政黨活動的點滴回憶	王紹鏊（398）
記南京臨時政府及其他	任鴻雋（410）
武昌起義後粵軍北伐始末	姚雨平（419）
我參加辛亥革命的經過	林虎遺稿（429）
辛亥革命前後雜憶	仇 鰲（437）
辛亥革命親歷紀實	何 遂（456）
共進會從成立到武昌起義前夕的活動	李白貞（497）
辛亥廣州之役前黨人在日本購運軍火 的經過	王子騫（528）
癸丑討袁回憶錄	耿毅遺稿（536）
跟隨孫中山先生十余年的回憶	馬 湘（559）
回憶先君克強先生	黃一歐（608）
憶聲洞	王 穎（619）
光復會見聞雜憶	周亜辺（624）

第二集以下は地域別になっている。細目は28頁参照。

第二集（1962年6月，540頁，写真15枚）

湖北，湖南，廣東，廣西，雲南

第三集（1962年9月，515頁，写真15枚）

四川，貴州，西藏

第四集（1962年11月，513頁，写真22枚）

上海，浙江，江蘇，江西，安徽，福建，台灣

第五集（1963年2月，611頁，写真21枚）

陝西，山西，內蒙，山東，河南，河北，甘肅，寧夏  
青海，伊犁，東北

## 中華民國開國五十年文獻 同編纂委員會編

台北 中央文物供應社 1961～64

中華民國開國，即ち中華民國の成立五十周年を記念して編集された民国成立にいたる革命關係資料集。第一編「革命源流與革命運動」，第二編「辛亥革命與民國建元」の2編に分れる。第一編は，革命遠源，列強侵略，清廷之改革與運動，革命之倡導與發展の4部分から成るが，現在までに見られるのは，第四部分の革命之倡導與發展だけである。この第四部分は更に興中會，中國同盟會の2部に分れる。その内容は次の通り。

第一編第九冊 興中會上（1964年，691頁）

第22章 革命之萌芽（1）

23章 革命組織之創立（259）

24章 華南革命運動（529）

第一編第十冊 興中會下（1964年，763頁）

第25章 國外革命運動（1）

26章 華中革命運動（273）

27章 發行報刊鼓吹革命（499）

第一編第十一冊 中國同盟會一（1964年，760頁）

第28章 中國同盟會在日本（1）

29章 中國同盟會在歐洲（379）

30章 中國同盟會在南洋與大洋洲（445）

第一編第十二冊 中國同盟會二（1964年，730頁）

第31章 中國同盟會在國內之組織（1）

32章 中國同盟會在美洲之組織（421）

33章 中國同盟會革命報告（529）

第一編第十三冊 中國同盟會三（1964年，749頁）

第34章 革命起義（1）

35章 鐵血行動（579）

第一編第十四冊 中國同盟會四（1964年，584頁）

第36章 辛亥革命之先聲（1）

第二編「辛亥革命與民國建元」は，第一冊武昌首義と第二冊開國規模が出ている。その内容は次の通り。

第二編第一冊 武昌首義（1961年，618頁）

第1章 中部革命運動之開展（1）

第2章 武漢起義與湖北光復（219）



## 第二編第二冊 開国規模 (1962年, 654頁)

## 第3章 中華民國臨時政府之成立 (1)

## 4章 南北議和 (417)

各章はさらに節, 項, 目にわかれ, 各項目毎に資料が掲げられる。資料には普通に出版されている張難先「湖北革命知之録」, 曹亜伯「武昌革命真史」, 馮自由「革命逸史」などのほか, 中華民國開国五十年 文献 編纂委員会, 中国国民党中央党史史料編纂委員会所蔵の珍しい文書も含まれている。資料を以てつづられた詳細な概説書ということができる。含まれる資料は豊富。但し原文献がそのまま転載されるのではなく, 多くのばあい寸断掲載されている。革命に対する見方は異っているが, 中国史学会編「辛亥革命」8冊 (中国近代史資料叢刊) と同種のもの。

## 辛亥革命烈士詩文選 蕭平編 吳小如注

北京 中華書局 1962 269p.

もともと革命の意気昂揚の教材として編修されたもの。1894年興中会が成立してから, 辛亥革命を経て, 1915年反袁の第三革命に至るまでの革命烈士, 史堅如, 鄒容, 吳樾, 陳天華, 劉道一, 禹之謨ら37人の詩文の中から, 光輝な民主主義思想, 強烈な革命意志に燃えるものを, 各人について1編乃至数編を選択し集める。たとえば鄒容については, 革命歌, 和西狩獄中聞沈禹希見殺, 獄中答西狩, 塗山, 絶命詞, 革命軍緒論, 革命之原因の7篇が掲げられる。各人については簡単な経歴が記されるほか, 出典が明記され, 難解な字句には注釈がつけられている。

## 近代史資料 1954年

閩爾昌旧存有閩武昌起義的函電	卞孝萱輯	1-48
光復杭州回憶録	鍾豐玉	1-89
辛亥革命浙江光復紀実	呂公望	1-104
浙江辛亥革命光復記事	張效巡	1-118
辛亥革命浙軍攻克南京紀実	呂公望	2-33
辛亥革命浙軍進攻南京記事	張效巡	2-45

## 1955年

天津国民捐和同盟会活動的回憶	劉清揚	2-13
辛亥革命時期的鉄血会	丁開嶂	2-21
辛亥綏包革命史実紀述	楊雲階	2-32
襄陽光復記	毛拔	4-94
孫中山与袁世凱的鬭争	張国淦	4-122

## 1956年

山東仮独立資料	卞孝萱輯	1-120
辛亥革命杭州光復別記	斯道卿述	1-144
共進会の原起及其若干制度	鄧文鞏	3-7

## 石叟牌詞叙録

譚人鳳

3-26

## 鄒永成回憶録

鄒永成口述

3-77

## 貴州辛亥革命史略

胡剛・吳雪傳編

4-73

## 1957年

## 關於辛亥革命浙江省城光復記事の補

充資料	馬叙倫	1-47
辛亥光復南京記事	茅乃登・茅廼封	1-61
粵省辛亥革命回憶録	鍾德貽	1-99
浙軍十八年の回憶録	斯道卿	2-76
共進会宣言書	張静廬録	2-94
辛亥光復蓬萊記事	隱名	4-15
辛亥光復榮成回憶録	張霽人	4-22
辛亥閩外革命始末記	李培基	4-28
辛亥以後湘西大事記	田名瑜	4-35
辛亥革命山西資料片断	卞孝萱輯	5-20
太原辛亥革命回憶録	石榮璋	5-35
辛亥塞北革命紀略	方仲純	5-42
辛亥工程營杭州起義記	來偉良	6-67
鎮江光復史料	張立瀛	6-75
川漢鐵路資料三種	舒君実輯	6-99

## 1958年

紹興光復時見聞	陳燮枢	1-105
辛亥革命回憶録		
辛亥革命四川回憶録	楊兆蓉	2-24
辛亥革命在柳州	李墨馨	2-48
惠州光復記	陳景呂	2-50
欽州起義記	劉驥	2-53
揚州光復之回憶	張羽屏述	2-60
回憶揚州光復	周無方	2-63
興化県光復記略	任洽丞	2-65
嘉興光復記略	馬濟生述	2-67
南京戰事略記	莊晤	2-69
辛亥革命時期的広西	耿毅述	4-89
張広建電稿	蘇蕙輯	4-107
「辛亥光復蓬萊記事」補正	陳修夫	4-133

## 1963年

広州起義報告書	黄興	2-1
辛亥革命襄陽見聞録	張玉衡	2-5

## 安徽史学通訊 1959年

蕪湖地区的辛亥革命	安徽科学分院歴史研究室	6-71
-----------	-------------	------

## 辛亥革命回憶録 第二集

辛亥武昌首義親歴記	熊秉坤 (1)	
辛亥首義陽夏光復紀実		



- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 王纘承遺稿 沈疇春整理 (17)           | 惠州光復見聞 苗致信 (343)           |
| 記詹大悲弁「大江報」和漢口軍政分布          | 惠州府中學生在辛亥革命時期的活動 王映樓 (348) |
| 盧智泉 溫楚珩 (47)               | 紫金光復前後 甘善齋 (352)           |
| 辛亥革命時期湖北學生軍始末記             | 潮汕光復回憶 張鰥村 (358)           |
| 周克之原著 陳瑞萸整理 (55)           | 一個山村里的革命風暴 梁 若 (363)       |
| 參加獨立將校決死團經過 王振民 (62)       | 大埔、永定、上杭的光復和革命軍            |
| 南京陸軍第四中學學生赴武漢參加            | 在長汀的失敗 蕭文遺稿 (368)          |
| 革命經過 沈鑄東 (69)              | 梅州光復回憶 溫猗遠 (385)           |
| 日知會在黃岡的活動 程起陸 (75)         | 欽鼎三那反抗糖捐關爭與欽防之役 羅綬章 (392)  |
| 武昌首義前後憶事八則 李健侯 (79)        | 化州光復前後十年見聞錄 彭中英 (396)      |
| 鄂革命軍被迫退伍經過與陳佐黃、            | 辛亥革命前後琼崖革命黨人的活動 梁秉樞 (405)  |
| 王耀東、彭紀麟烈士事略 魯祖軫 (90)       | 辛亥革命時期廣東民軍概況 李朗如 陸 滿 (401) |
| 記鄂軍殺端方與回援武昌 丁振華 (97)       | 記廣東瀛字敢死軍 胡漢賢 (417)         |
| 民社成立與黎袁勾結 萬鴻階 (106)        | 王和順惠軍與陳炯明循軍衝突內幕 李薊皋 (420)  |
| (湖南)                       | 執信革命事跡述略 朱秩如 (422)         |
| 辛亥湖南光復的回憶 閻幼甫 (112)        | (廣西、雲南)                    |
| 黃興與明德學堂 黃一歐 (132)          | 鎮南關起義見聞 鄒惠琪等口述 (430)       |
| 與黃克強相交始末 章士釗 (138)         | 我參加同盟會和回廣西進行革命活            |
| 譚延闓統治湖南始末 周震麟 (150)        | 動的情況 劉 岨 (440)             |
| 湖南光復及四十九標援鄂 余 韶 (159)      | 同盟會在桂林、平樂的活動和廣西            |
| 一九一二年回湘籌組國民黨支部和            | 宣布獨立的回憶 李任仁 (448)          |
| 辦理選舉經過 仇 鰲 (176)           | 同盟會在南寧的活動和廣西獨立前後 雷沛鴻 (467) |
| 辛亥湘西光復經過 黃穆如 (185)         | 辛亥革命前後的廣西局勢和廣西             |
| 長沙響應起義見聞 陶菊隱 (192)         | 北伐軍 黃紹竑 (478)              |
| 辛亥回憶三則 文 斌 (201)           | 辛亥革命時期廣西的報刊 蒙起鵬 (491)      |
| 辛亥革命在湖南所見 劉介松 (204)        | 同盟會在南寧的活動 梁烈璣 (494)        |
| 關於焦達峯二三事 閻幼甫 (211)         | 辛亥革命在柳州 關轡安等口述 (503)       |
| 回憶禹之謨 彭重威 (214)            | 平南起義和會攻潯州 潘乃德 (512)        |
| 記楊任常德遇難 凌漢秋 (236)          | 廣西獨立時融縣的關爭 胡佩生 (518)       |
| 我所知道的馬福益 張平子 (239)         | 二次革命柳州起義親歷記 覃子權 (522)      |
| 策動馬福益起義的經過 萬 武 (245)       | 李立廷在玉林五屬的反清關爭 李繼源 (527)    |
| 岳陽十日記 宋式驥 (249)            | 覃老堯、陸垂堯在四十八岸的反清關爭          |
| 譚心休「招撫」靖始末 李晴雲遺稿 (255)     | 黃孟倫 卓通 陶志方 (535)           |
| (廣東)                       |                            |
| 庚子惠州三洲田起義訪問錄 張友仁 (263)     | 第三集 (1962年9月, 515頁, 写真15枚) |
| 庚戌新軍起義前後的回憶 張鰥村 (281)      | (四川)                       |
| 追憶庚戌新軍起義和辛亥三月二十            | 辛亥前我參加的四川幾次武裝起義 熊克武 (1)    |
| 九日之役 姚雨平 (287)             | 四川辛亥革命親歷記 但懋辛 (26)         |
| 庚戌之役倪映典遇害真相 陳景呂 (299)      | 憶成都保路運動 石体元 (42)           |
| 同盟會在港澳的活動和廣東婦女界            | 大漢四川軍政府成立前後見聞 王右瑜 (68)     |
| 參加革命的回憶 趙連城 (302)          | 重慶蜀軍政府成立親歷記 向楚遺稿 (74)      |
| 黃花崗起義前後雜憶 宓德明 (323)        | 四川辛亥革命見聞錄 吳晉航 (99)         |
| 革命黨人進攻兩廣總督衙門見聞錄 王邁常 (327)  | 辛亥重慶光復的回憶 溫少鶴 (111)        |
| 溫生才刺李瑞案與廣州起義見聞紀實 劉乃助 (331) | 同盟會在四川的幾次武裝起義 陳紹伯 (117)    |
| 辛亥廣東獨立傳信錄 鄧警璽 (334)        | 記辛亥四川起義 張汝杰 張惠昌 (125)      |
| 香山起義回憶 鄭彼岸 (338)           | 同盟會在四川的活動 黃遂生 (129)        |
|                            | 資州羅泉井會議與組織同盟軍              |

第三集 (1962年9月, 515頁, 写真15枚)

(四川)

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 辛亥前我參加的四川幾次武裝起義 | 熊克武 (1)       |
| 四川辛亥革命親歷記       | 但懋辛 (26)      |
| 憶成都保路運動         | 石体元 (42)      |
| 大漢四川軍政府成立前後見聞   | 王右瑜 (68)      |
| 重慶蜀軍政府成立親歷記     | 向楚遺稿 (74)     |
| 四川辛亥革命見聞錄       | 吳晉航 (99)      |
| 辛亥重慶光復的回憶       | 溫少鶴 (111)     |
| 同盟會在四川的幾次武裝起義   | 陳紹伯 (117)     |
| 記辛亥四川起義         | 張汝杰 張惠昌 (125) |
| 同盟會在四川的活動       | 黃遂生 (129)     |
| 資州羅泉井會議與組織同盟軍   |               |



唐宗堯 胡恭先 (142)	(貴州)	
立憲派人和四川諮議局 張惠昌 (145)	貴州辛亥革命的前前後後	張彭年 (439)
四川袍哥与辛亥革命 陳書農 (174)	貴州自治学社和憲政会的鬭争	蕭子有 (453)
内江独立前後 吳樹韓 (177)	自治学社与哥老会	胡寿山 (466)
回憶辛亥革命川東綏定, 東郷地区光復前後	辛亥革命時期貴州陸軍小学的一些活動	劉革園 (479)
王維舟 (185)	貴州的耆老会	嚴池華 (493)
忠県辛亥革命的回憶 陳德甫 (190)	魯屏周殺滇軍梅志逸見聞	杜叔機 (497)
巫山県の革命活動 宋子然 宋子哲 吳宝秋 (196)	貴州辛亥革命前後の幾点回憶	阮俊齋 (502)
奉節反正の経過	(西藏)	
政協奉節県委員会社会人士学習小組 (203)	辛亥革命時西藏人民的祝願	喜饒嘉錯 (508)
記崇慶一支同志軍の始末 陳師雄 (207)	回顧辛亥革命前後の西藏情况	
同盟会与川西哥老会 王蘊滋 (218)	桑頗・才旺仁増 朗頓・貢嘎旺秋 (510)	
灌県保路同志会活動情況的回憶 羅英等 (224)	第四集 (1962年12月, 513頁, 写真22枚)	
松, 理, 茂, 汶蔵族人民文清鬭争 索觀瀛 (227)	(上海)	
大渡河, 大相嶺阻撃清辺軍	辛亥上海光復前後 (座談会記録)	( 1 )
吳光駿 蕭子臣 孔慶宗 楊伯謙 (230)	辛亥滬寧光復の片断回憶	黄一欧 ( 20 )
西昌辛亥見聞 胡恭先 (235)	攻占上海製造局親歴記	王子騫 ( 26 )
自井辛亥反正見聞 楊西舟 (239)	光復軍攻克上海江南製造局及陳其美	
辛亥秋鄂軍殺端方瑣記 羅任一 (242)	纂取滬軍都督之真相	楊鎮毅遺稿 ( 31 )
同盟会在叙永県活動紀実 李鉄夫 (245)	李燮和滬寧革命之経過	余煥東 ( 35 )
犍為同志軍見聞録 寧芷邨 (253)	略談上海光復之役	郭漢章 ( 38 )
大足同志軍 陳日剛 (258)	上海光復時の巡防營和吳淞炮台	周南陔 ( 42 )
古蘭県独立経過 蕭若愚 黄玉清 王堯夫 (272)	上海光復前夕的一次重要会議	沈煥唐 ( 48 )
綦江県辛亥起義 政協綦江県委員会 (279)	接洽上海海軍反正和組織海軍陸戦隊	
叙州府独立和滇軍侵占川南 賴建侯 (283)	会攻南京回憶	王時沢遺稿 ( 49 )
蜀北軍政府成立始末調査記 南充師範学院 (287)	辛亥革命時期的蘇浙学生軍団	田頌堯 ( 56 )
李紹伊領導大竹農民起義の経過	上海女子北伐敢死隊	杜 偉 ( 59 )
政協大竹県委員会 (294)	南洋公学的一九〇二年罷課風潮和	
辛亥革命前“大竹書報社”の革命活動	愛国学社 (座談記録)	( 63 )
政協大足県委員会 (300)	辛亥革命時期上海新聞界動態	嚴独鶴 ( 78 )
酈水県辛亥反正経過 任正格 (303)	辛亥革命前後の上海新聞界	包天笑 ( 86 )
回憶辛亥革命達県的情景 梅吉菴 (316)	(浙江)	
東郷光復記 石体元 (319)	辛亥革命在浙江	葛敬恩 ( 91 )
張百祥革命事略 杜綱百 (329)	光復会前期の活動片断	陳 魏 (127)
「重慶日報」創弁人卞小吾烈士事迹 卞仲璠 (336)	記光復会二三事	沈黙民 (131)
辛亥革命烈士謝奉琦事略 政協自貢市委員会 (340)	大道師範学堂	朱贊卿 (143)
清末民初四川の軍事学童及川軍派系 張仲雷 (345)	西湖白雲庵与辛亥革命之關係	黄元秀 (150)
辛亥雲南反正親歴記 王冠軍 (365)	浙軍光復杭州和馳援南京親歴記	来偉良 (152)
南防光復回憶録 馬竹髯 (372)	記攻焚浙江撫署之役	趙得三 (161)
楊振鴻滇西革命紀略 何 畏 (380)	杭州光復之夜的一次官紳緊急会議	許炳堃 (165)
陸軍第十九鎮及雲南講武堂 祝鴻基 (390)	湖州光復回憶	邱寿銘 (167)
辛亥革命前後の箇旧 張若谷 (396)	辛亥革命時期的硤石商団和工兵鉄	
随唐繼堯入黔憶事五則 李佩珩 (401)	道大隊	吳欣木 (170)
蔡松坡先生事略 雷 颯 (406)	寧波光復親歴記	林端輔 (174)
我对蔡鏐的回憶 李文漢 (427)	(以下省略)	
憶蔡鏐 詹秉忠 孫天霖 (432)		



手 (439)  
育 (453)  
山 (466)

園 (479)  
華 (493)  
幾 (497)  
寄 (502)

借 (508)  
火 (510)

( 1 )  
次 ( 20 )  
篤 ( 26 )

高 ( 31 )  
東 ( 35 )  
章 ( 38 )  
亥 ( 42 )  
害 ( 48 )

高 ( 49 )  
亮 ( 56 )  
韋 ( 59 )

( 63 )  
鵠 ( 78 )  
笑 ( 86 )

恩 ( 91 )  
魏 ( 127 )  
民 ( 131 )  
卿 ( 143 )  
秀 ( 150 )  
良 ( 152 )  
三 ( 161 )  
達 ( 165 )  
銘 ( 167 )

木 ( 170 )  
輔 ( 174 )  
(以下省略)

センター・ニュース

【奨学金の支給】

大学院学生もしくはこれに準ずるもので、近代中国の研究をしようとするものに、下記要領にて、(A)、(B)二種の奨学金を支給します。

- 応募資格：(A) 大学院修士課程の在学学生、もしくは大学学部を卒業したがまだ定職につかず研究をつづけているもの。  
(B) 大学院博士課程の在学学生、もしくは大学院修士課程あるいは博士課程を終えたがまだ定職につかず研究をつづけているもの。

- 募集人員：(A) 3名  
(B) 2名

- 支給金額：(A) 年額12万円（1名につき）  
(B) 年額24万円（1名につき）

応募手続：下記書類を整えてセンターに提出する。  
書式は任意。

- 1) 履歴書
- 2) 在学証明書または卒業証明書
- 3) 成績証明書
- 4) これまで研究したことの要旨（1,000字程度）
- 5) 1年間の研究計画（1,000字程度）
- 6) 研究論文（学士、修士、博士論文でも、演習のレポート類でも、その他の論文でもいい、1篇を提出すること、提出できる論文のないときには、(4)の要旨を1,000字以上の詳細なものにすること、提出された論文は6月中に本人に返却する。）
- 7) 研究上の指導者（応募者のことを尋ねる便宜のためであるから、名目上の指導教官でなく、これまで実際に指導を受けた人をあげてほしい。2名以上書いてもさしつかえない。）

募集期限：1965年5月31日

銓衡方法：委員会にて銓衡し、その結果は6月中に本人に通知する。

銓衡のため面接を行うことがあるかも知れない。

義務：奨学金を受けたものは、1年の終了後、研究経過をセンターに報告しなければならない。報告書は任意の用紙を用い、字数は1,000字程度とする。この報告書を提出する以外に、何等の義務もセンターに対して負わない。

【研究旅費の補助】

近代中国研究のため、1カ月以内の資料蒐集旅行をしようとする研究者に、下記要領にて、旅費の援助をいたします。

ここに研究者というのは、既に研究論文を書いたことのあるものか、大学院の学生を指します。

資金総額：30万円（年間）

支給金額：往復旅費（2等汽車賃、遠隔地のばあいは急行料金を含む）  
滞在費（1泊2,000円、但し8泊以上は1泊1,500円）

申請手続：センター所定の申請用紙に下記事項を記入して申請する。

- 1) 官職氏名
- 2) 著書論文目録（大学院学生の場合は教官の推薦状）
- 3) 研究題目
- 4) 旅行目的（赴こうとする研究機関図書館、見ようとする図書、等）
- 5) 旅行期間
- 6) 乗車区間

審査方法：可否の審査は月例の常任委員会にて行い、その結果は、申請後1カ月以内に本人に通知する。

総額30万円に達したときは打切る。

義務：研究旅費の補助を得たものは、旅行終了後2週間以内に、センター所定の報告用紙に、赴



## センター・ニュース

いた研究機関図書館、見た図書等を記入し、センターに提出する。

## 【研究論文の募集】

論文集「近代中国研究」第8輯の原稿を、下記要領にて募集します。

内 容：近代中国に関する実証的研究

分 量：原則として400字詰原稿用紙150枚以内

要 約：応募原稿には、1,000字程度の要約を必ず添付する。

期 限：1965年5月31日

審 査：委員会にて審査し、その採否は6月中に本人に通知する。不採用の論文は返却する。

## 【出版物目録】

東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録 67頁 B5

東洋文庫近代中国研究室に別置されている欧文図書の著者名目録。1962年3月末日現在、1420部の蔵書が収録されている。

東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録 204頁 B5

東洋文庫近代中国研究室に別置されている邦文図書の目録。1962年12月末日現在、3810部の蔵書が、著者および書名別に配列されている。

東洋文庫近代中国研究室中文図書目録 207頁 B5

東洋文庫近代中国研究室に別置されている中文図書の目録。1963年12月末現在4607部の蔵書が収録されている。

近代中国研究 第5輯 341頁 A5

20世紀初頭における蘇州近傍の一租棧とその小作制度

村松 祐次

咸豊二年鄞県の抗糧暴動

佐々木正哉

中国文雑誌論説記事目録（時務報）

近代中国研究 第6輯 359頁 A5

清末民初の江南における包攬関係の実態とその決算報告

村松 祐次

第一次国共合作期における内蒙古民族運動

坂本 是忠

5・30事件と在華紡

中村 隆英

武漢政府の崩壊過程

栗山 喜博

中国文雑誌論説記事目録（商務官報）

中国関係日本文雑誌論説記事目録 1 240頁 B5

「外事警察報」「北京週報」「燕塵」の3誌の論説記事目録。

中国関係日本文雑誌論説記事目録 2（7月刊行予定）

「支那時報」「東亜」「情報」「調査月報」「特調班月報」の5誌の論説記事目録。

近代中国研究センター彙報 3 32頁 B5

江西ソヴェト関係資料目録

新刊案内

「咸豊四年広東天地会の叛乱」補

佐々木正哉

センター・ニュース

近代中国研究センター彙報 4 32頁 B5

太平天国史研究論文目録

日本人の新中国旅行記

センター・ニュース

新刊紹介

近代中国研究センター彙報 5 32頁 B5

アメリカで見た軍閥に関する若干の伝記について

波多野善大

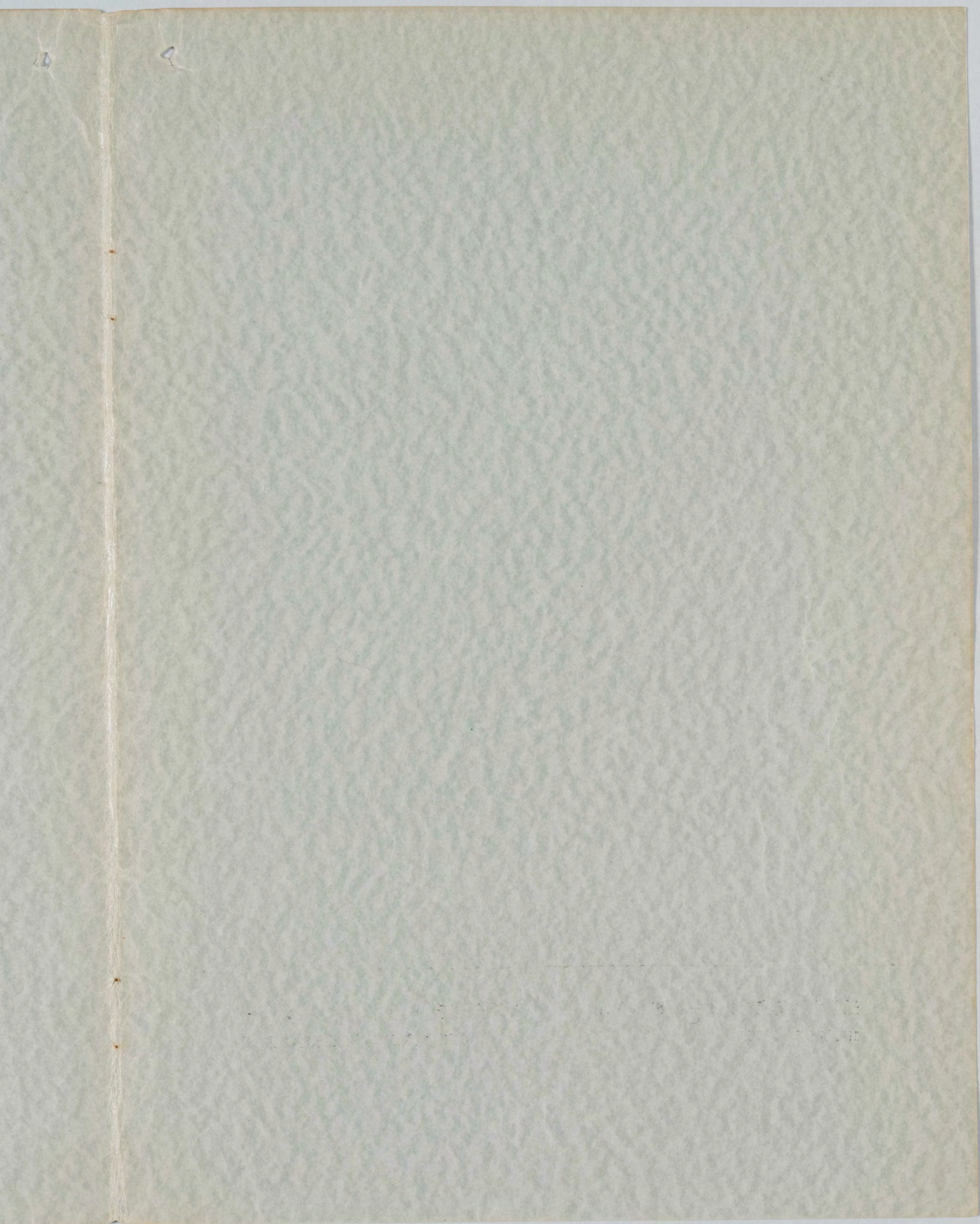
『中国共産党五年来之政治主張』について

市古 宙三

新刊紹介

新収図書目録（マイクロ・フィルム）







近代中国研究センター彙報 No.6

1965年4月30日発行

編集発行 近代中国研究センター

東京都文京区駒込上富士前町147東洋文庫

